



中近世における宗教運動と  
メディア・世界認識・社会統合

文部科学省 科学研究費助成事業  
学術変革領域研究(B) 2020～2022年度

# リモ ReMo研 ニューズレター

01

2022.03



## 巻頭言

日々、私たちはメディアから情報を得て、この世界のあり様について認識を更新しています。メディアとして、20世紀までは本、新聞、ラジオ、テレビあたりが主要なものでしたが、今世紀に入ってインターネットが普及し、SNSによって私たちの世界観の更新頻度は一気に加速しました。現今世界に衝撃を走らせているロシアによるウクライナ侵攻にしても、インターネット・メディア抜きに最新の戦況を知ることはできません。しかし、そうした技術革新を無邪気に喜ぶわけにもいきません。俗情が煽られ、ウソやデマ、不毛な論争を目の当たりにするのはもはや日常、自分の意志で探り当てたと思っている情報はAIが用意したものです。ここに、学問諸分野を総動員してメディアの性質を明らかにしようという契機が生まれるわけですが、メディアは歴史によって形作られ、そして歴史に影響を与えてきた、という往還作用を思い起こせば、過去について研究する学問がこの問題に取り組む意義は大きいと言えます。

メディアというと一般的に書籍、雑誌、新聞、映像など、大量生産可能なものを思い浮かべますが、そこでは印刷技術が進歩する前に無数に作られた「1点もの」、手を使って丹精に制作された写本、あるいは独特な意匠が施された建築物などが抜け落ちています。しかし、これらもまた「知識」を載せたメディアに他なりません。メディア史の泰斗ハロルド・アダムズ・イニスは、古今東西の技術革新のうち、コミュニケーションに関するものが社会変化の主動因になっていると考え、こう述べています。「コミュニケーション・メディアは時間および空間にわたる知識の伝播に重大な影響力をもっており、その影響力をその文化的背景のなかで正しく評価するには、その諸特性を研究することが必要となる」(『メディアの文明史』筑摩書房、2021年、77-78頁)。これは実に啓示的な一文です。

ところが、イニスやそれを引き継いだマクルーハンらの議論には物足りなさも覚えます。それは、近代以前、メディアと宗教が切っても切れない関係にあったことへの踏み込みが十分でないからです。とくに中世において、文書や図像など各種メディアを駆使することで、なんとかして自らイメージする世界観を伝え広めようとしてきたのは宗教者にほかなりません。中世のヨーロッパでは、キリスト教の聖職者や修道士が長らく文字を独占し、多種多様なメディアを通してキリスト教文化を形あるものにしました。そして、その営みは近世に引き継がれます。聖書の註解書に描かれた想像力あふれるイニシアル、説教執筆を助ける説教術書、宣教の成果としてヨーロッパに

文部科学省 科学研究費助成事業  
学術変革領域研究(B)2020～2022年度



中近世における宗教運動と  
メディア・世界認識・社会統合

# ReMo<sup>リモ</sup>研 ニューズレター

2022.03 01

## contents

目次・巻頭言	1
領域概要	3
研究班紹介	5
2021年度の活動	9
2020～2021年度業績一覧	18
研究事例	25



もたらされた日本人殉教者の聖遺物、等々。このようなメディアを通して、人々は自己の世界を知り、他者の世界を知り、社会的なネットワークを構築していきました。

そして忘れてはならないのは中世の日本です。そこでも同様に、仏僧ら宗教者が中心となって、文書や図像などのメディアを用いてこの世／あの世のあり方を描いてきました。ユーラシアの両端に位置するヨーロッパと日本。これらを通時的にも共時的にも比較してメディアの諸特性を明らかにする、というのがこの研究プロジェクト「中近世における宗教運動とメディア・世界認識・社会統合」(Religious Movement from ReMo研と呼んでいます)の目指すところです。異なる地域、異なる宗教文化を取り上げることによって、メディアが各文化圏の構築に果たした役割はいつそう明確になってくるでしょう。

ReMo研は、まさにそうした人類の営みを、歴史学、美術史学、文学という3つの方法により多角的に明らかにしよう、という試みです。しかも、プロジェクトは4つの研究班に分かれており、取り扱うテーマによってこれらが自由自在に組み合わせたり、無数の共同研究が生まれる仕組みになっています。また、この共同研究を推進することで、日本史の知見を国外研究者と共有し、国際的な研究ネットワークを構築すること、そして若手研究者の育成も大きな課題の一つです。

2020年に学術変革領域研究の制度が始まり、その初年度にReMo研は人文学で唯一採択されました。それだけにこのプロジェクトが果たす役割は大きいはずですが、新型コロナウイルス感染症の影響によりメンバー間の交流は当初の計画通りとはいきませんでした。しかしそれでも、初年度に構築した基盤の上に、2年目は大変充実した1年になりました。

このニューズレターでその様子をお伝えするとともに、最終年度である3年目に向けて、プロジェクト内外の交流の一助になることを強く願っています。



エルベ川沿いの丘陵地帯「ザクセンのスイス」にて

中近世における宗教運動とメディア・世界認識・社会統合  
領域代表

東京都立大学 人文社会学部

大貫 俊夫





## 領域概要

### 領域について

本プロジェクトは、中世・近世のヨーロッパ、アメリカ大陸、日本におけるキリスト教修道制、そして中世日本の寺社を研究対象とし、修道士、仏僧および神職がメディアを創出・活用し、文化・思想的な革新運動を展開したことについて、文化圏横断型の比較研究をするものである。

歴史学とその隣接諸分野の成果を見渡すと、修道士たちは修道戒律、説教などの文書のほか、文学作品、彩飾写本、聖堂装飾、あるいは巡礼などの仕組みも含め、多種多様な形態のメディアを駆使して自らの宗教理念を発信していたことが分かる。しかし、こうした努力がいかに社会を統合・規律化し、あるいはまた社会に持続性と弾力性を与えてきたかについては、より体系的な研究が求められる。

修道士や仏僧および神職は、宗教的超越を指向しつつ、司牧／教化を通じた社会変革への意思と行動力によって多種多様なメディアを創造し、社会に対して革新的な世界認識と仕組みをもたらし、社会の持続的発展に貢献したのではない。こうした現象を異なる宗教文化のあいだで共時的・通時的に比較することで、各々の個性がきわだち、より広い視野から宗教運動と当該社会とのあいだのダイナミックな影響関係が明らかになるのではない。本研究領域は、この観点を4つの計画研究班で共有し、各計画研究班は以下の3つ

の目的を達成して宗教運動の文明史的な意義を体系的に明らかにする。

1. 中近世において宗教運動を先導した人々は、宗教共同体の内外でコミュニケーションを促進するために、いかなるメディア（媒介物=文字テキスト、図像、仕組みなど）を創出し普及させたのかを明らかにする。
2. 宗教者は、1. のメディアを通じてどのような言説を宗教共同体の内外に向けて発信し、またどのような価値観と世界認識の仕方を新たにもたらしたのかを明らかにする。
3. そして最後に、宗教者は1. と2. を通していかに社会の教化を推進し、社会を統合し、文明に変動をもたらしたのかを明らかにする。

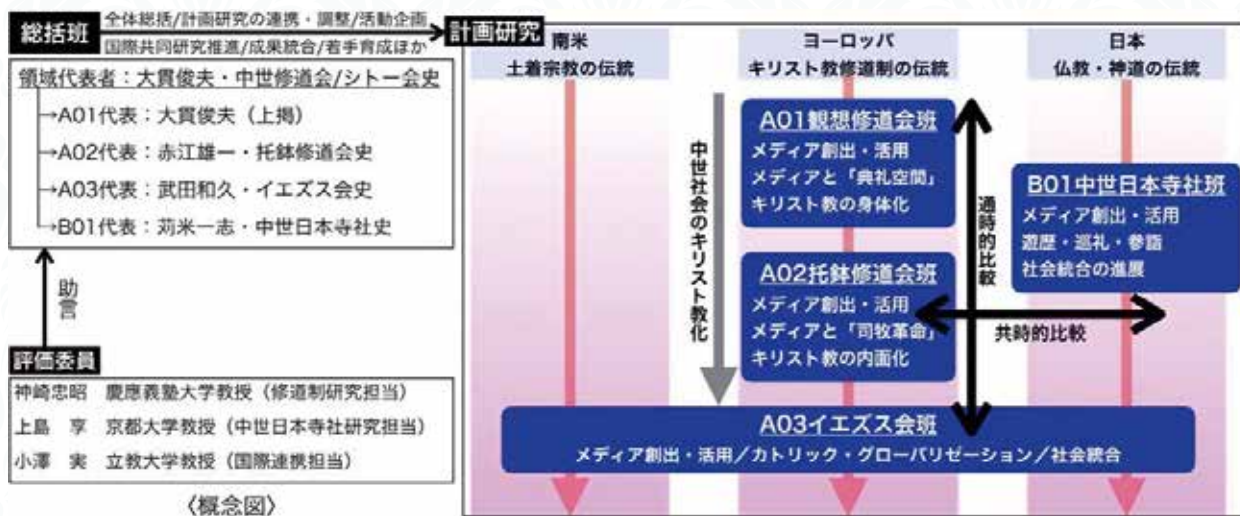
本研究領域は、単なる比較宗教史研究の延長ではない。宗教運動が世俗社会と緊張関係を持ちつつ、その持続的発展にどのように関わっていたのか、というより大きな枠組みにアプローチするものである。こうした取組みにより、宗教運動を社会のなかで実践・継承される英知ととらえ直し、その文明史的意義を総合的に明らかにする、そうした新しい学術領域を開拓したいと考えている。



「楽園に導くドミニコ会修道士たち」フィレンツェ、サンタ・マリア・ノヴェッラ修道院回廊スペイン人大礼拝堂壁画、14世紀



## 研究組織



### 研究班について

本研究プロジェクトは4つの研究班で構成されている。

#### A01：観想修道会班

「観想修道院による「典礼空間」の形成に関する総合的研究」

#### A02：托鉢修道会班

「托鉢修道会の司牧革命におけるメディアの総合的研究」

#### A03：イエズス会班

「イエズス会の近代性に関する批判的考察のための総合的歴史学研究」

#### B01：日本中世寺社班

「中世日本の地域寺社をめぐる遊歴・巡礼・参詣の総合学際的研究」

本研究プロジェクトは、研究班の垣根を越えて柔軟に共同研究体制を築くところにその特色がある。日常的に研究会を開催しつつ、重要なテーマごとに研究班を架橋する研究ユニットが立ち上がり、国際共同研究も推進する。また、歴史学、美術史学、文学という3つの人文学ディシプリンの協同によってテキストと図像の総合的解釈を実現させ、宗教者が生み出したメディアの特質を通時的・共時的に比較し、宗教運動と当該社会とのあいだのダイナミックな影響関係について歴史像を新たに提示していく。

### 総括班について

総括班は、領域代表者と各計画研究代表者の計4人で構成される。各計画研究班と緊密に連携して研究成果をまとめるとともに、個々の研究班の内部や異なる研究班同士での通時的比較（観想修道会、托鉢修道会、イエズス会の比較など）や共時的比較（観想修道会／托鉢修道会と中世日本寺社、日本と南米におけるイエズス会の活動の比較など）を実現するため、班の垣根を越えた研究ユニットを組織し、分野横断的な研究を推進する。こうした大きな方針のもとで、総括班は計画研究の連携や調整、活動の企画、国際共同研究の推進、成果統合、若手育成、コンプライアンスの周知・徹底などを主体的かつ積極的に行っていく。

#### 研究代表者

大貫 俊夫 (東京都立大学)

#### 研究分担者

赤江 雄一 (慶應義塾大学)

武田 和久 (明治大学)

苅米 一志 (就実大学)

#### 評価委員

神崎 忠昭 (慶應義塾大学)

上島 享 (京都大学)

小澤 実 (立教大学)



## 研究班紹介

### AO1 観想修道会班

観想修道院による「典礼空間」の形成に関する総合的研究

#### 班構成

##### 研究代表者

大貫 俊夫（東京都立大学大学院人文科学研究科・准教授）

##### 研究分担者

菊地 重仁（青山学院大学文学部・准教授）

金沢 百枝（多摩美術大学美術学部・教授）

安藤 さやか（東京藝術大学大学院美術研究科・専門研究員）

山本 潤（東京大学大学院人文社会系研究科・准教授）

##### 研究協力者

片山 幹生（大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター・研究員）

北館 佳史（中央大学文学部・兼任講師）

林 賢治（アルベルト・ルートヴィヒ大学フライブルク・博士課程）

三浦 麻美（東洋大学人間科学総合研究所・客員研究員）



観想修道会班は、キリスト教の教義に対して信徒の「身体的な適応」が進化したとされる9～13世紀前半のヨーロッパ社会を対象に、観想的な生活を送る修道院が形成した「典礼空間」の内実と変遷過程を明らかにする。観想修道院は9～13世紀前半にかけて、今日のカトリック文化にまで通じる典礼文化を構築した。日々刷新を伴いながら実践される典礼、修道院の写字室で制作された戒律や典礼書などの文字テキストと彩飾写本、新たな意匠で装飾が施された修道院聖堂。本計画研究はこれらを総合して観想修道院の「典礼空間」と規定し、これを静的にとらえて安易にモデル化するのではなく、動的にとらえることによって、社会のキリスト教化と社会統合に及ぼした影響を明らかにしていく。

近年、ロウエルススの「聖なる空間」論（M.Lauwers, *Naissance du cimetière*, 2005）が多くの共同研究

を喚起している。そこでの研究方法上の特徴は歴史学と考古学による学際的研究であり、教会・修道院の発掘の成果が文字史料解釈の補強・修正に大いに寄与している（例えば *Construction de l'espace au Moyen Âge: Pratiques et représentations*, 2007）。本計画研究は、こうした動向から刺激を受けて立案された。これまで成果を上げてきた歴史学と考古学の共同研究体制に匹敵するユニットを構築し、「典礼空間」の解明を通じて新たな「聖なる空間」論を展開しようという試みである。考古学研究が取り組んできた修道院建築の空間再構成に学びつつ、これまで十分な連携がなされてこなかった人文3分野（歴史学、美術史学、文学）が互いの成果を参照し合い、文字テキストと図像の相互比較を実現し、分野横断の体制で「典礼空間」の特質を解明していきたい。



「契約の櫃と熾天使」サン・ジェルミニー・デ・ブレ礼拝堂アプシスのモザイク、9世紀



フォントネー、シトー会修道院回廊、12世紀



## 研究班紹介

### A02 托鉢修道会班

#### 托鉢修道会の司牧革命におけるメディアの総合的研究

##### 班構成

##### 研究代表者

赤江 雄一（慶應義塾大学文学部・教授）

##### 研究分担者

梶原 洋一（京都産業大学文化学部・助教）

原 基晶（東海大学文化社会学部・准教授）

駒田 亜紀子（実践女子大学文学部・教授）

荒木 文果（慶應義塾大学理工学部・講師）

##### 研究協力者

白川 太郎（早稲田大学大学院／日本学術振興会）



托鉢修道会班は、フランチェスコ会とドミニコ会などの、13世紀初頭に誕生した托鉢修道会と総称される四修道会に注目し、托鉢修道会が発達させた様々な「メディア」が、キリスト教化を個々人の内面にいたるまで推し進めようとするカトリック教会の「司牧革命」においてどのように機能したかを分析する。具体的には説教、説教や学問などを支える書物の形態や書物に描かれた図像、教育とそれに対する態度、美術の制作と受容、そして俗語の宗教的著作を取り上げ、13世紀から15世紀にかけての各メディアの特徴と相互連関を分析し、そうしたメディアが、当時の社会統合に果たした役割を検討する。

托鉢修道会は、理念的には俗人の司牧からは距離を置く観想的な修道制とは異なり、修道院の壁の外にでて、それまでの修道士は行わなかった喜捨を物乞いする托鉢を行い、当時誕生したばかりの都市の平信徒あるいは俗人に説教を行い告解を聞く「司牧」に積極的に携わることを自らの使命とした点で新しい。司牧への関わりは、13世紀初頭に開催された第四ラテラノ公会議（1215年）がキリスト教史上初めて、

すべてのキリスト教徒に対して少なくとも年に一度、司祭に自らの罪を告白するよう定めた点と結びついている。キリスト教化を個々人の内面にいたるまで推し進めようとする点で第四ラテラノ公会議と托鉢修道会の誕生は軌を一にし、これを「司牧革命」と呼ぶ（C. Morris, *The Papal Monarchy*, 1985）。司牧革命は、異端的民衆宗教運動が叢生していた当時のカトリック世界の社会統合を教化を通じて目指すものだった。

托鉢修道会は俗人に対する司牧に向けて様々な「メディア」を発達させた。説教、説教や学問などを支える書物の形態や書物に描かれた図像、教育とそれに対する態度、美術の制作と受容、そして俗語の宗教的著作などの「メディア」における托鉢修道会の革新性とは何か。そしてそれぞれの「メディア」は相互にいかに関係して司牧革命に寄与し、それはどのように当時の社会統合にかかわったのか。これらの問いを托鉢修道会班は探究し、そのために歴史学、美術史学、文学の専門家が個別課題を追究しながら密接に協働する体制をとる。



「ドミニコ会修道士と教皇」フィレンツェ、サンタ・マリア・ノヴェッラ修道院回廊スペイン人大礼拝堂壁画、14世紀



フランチェスコ会の総本山、アッシジのサン・フランチェスコ修道院をのぞむ



## 研究班紹介

### A03 イエズス会班

イエズス会の近代性に関する批判的考察のための総合的歴史学研究

班構成

研究代表者

武田 和久（明治大学政治経済学部・准教授）

研究分担者

折井 善果（慶應義塾大学法学部・教授）

平岡 隆二（京都大学人文科学研究所・准教授）

浅野 ひとみ（長崎純心大学人文学部・教授）

パトリック・シュウェマー（武蔵大学人文学部・准教授）

研究協力者

石川 博樹（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授）

岡田 正彦（天理大学人間学部・教授）

小俣ラポー・日登美（京都大学白眉センター／人文科学研究所・白眉特定准教授）

アンドレス・メナチェ（京都大学大学院）



本計画研究では近代初期のカトリック・グローバリゼーションを推進したイエズス会の歴史的意義を、同時代のアジアや南米の政治、経済、社会動向を踏まえた共時的な視点から分析する。またその際、同会の誕生以前の中世より存在した諸修道会の組織・活動理念を踏まえた通時的な分析視角も重視する。こうした二つの分析視角は、次の二つの問題提起の解明に有効である。すなわち、イエズス会が近代初期に地球規模で推進した「世界のカトリック化」という動きは、言い換えれば「カトリック文明」なるものを地球全体に普遍的に拡散・定着させるといふ壮大な実験だったわけだが、そうした試みは、彼らの革新的な思想に基づく実践というよりも、彼らが遭遇した世界各地の文化や慣習と呼応するかたちで変容、解体、再編された帰結だったのではないか（第一の問題提起）。またそうした大規模な実験は、イエズス会が、それまでの諸修道会が長期にわたり積み重ねてきた遺産の再現や応用だったのではないか（第二の問題提起）。

本研究ではこうした問題関心を共有しながら、他の観想

修道会班や托鉢修道会班、そしてイエズス会宣教が始まる前の日本の信仰環境を研究する中世日本寺社班との共同・比較研究を通じて、世界のカトリック化を目指したイエズス会が創出した各種著作や美術工芸品、文学作品といったメディアを子細に分析し、それが布教対象とされた人々の世界認識に与えた影響を考察し、最終的にいかなる理想的社会の構築が目指されていたのかという、イエズス会の宣教活動の文明史的意義を解明する。



天草の崎津集落と教会



ローマ、サンティニャツィオ聖堂（イエズス会）、17世紀



## 研究班紹介

### B01 日本中世寺社班

中世日本の地域寺社をめぐる遊歴・巡礼・参詣の総合学際的研究

班構成

研究代表者

苅米 一志（就実大学人文科学部・教授）

研究分担者

川崎 剛志（就実大学人文科学部・教授）

佐々木 守俊（清泉女子大学文学部・教授）

守田 逸人（香川大学教育学部・准教授）

服部 光真（元興寺文化財研究所・研究員）

小林 郁（皇學館大学研究開発推進センター・助教）

研究協力者

藤本 誠（慶應義塾大学文学部・准教授）

鎌倉 佐保（東京都立大学大学院人文科学研究科・教授）

湯浅 治久（専修大学文学部・教授）

千枝 大志（同朋大学仏教文化研究所・所員）

上野 進（徳島文理大学文学部・教授）



日本中世寺社班は、中世の地域寺社が有したリソースを民衆教化のためのメディアととらえ、その構造を明らかにした上で、僧侶・神職の遊歴および民衆の参詣・巡礼に焦点をあて、それらが創り出す世界認識と宗教的社会統合の在り方を追求する。

構想の出発点としては、2019年3月に開催された国際シンポジウム「司牧と修道制：800～1650年」において、苅米が報告“Pastoral Care of Buddhist Temples in Medieval Japan（日本中世の寺院による対世俗活動）”を行い、討論の場を通して、日本中世の寺社について西洋中世との比較が可能であるとの手応えを得たこと、また同年11月開催の仏教史学会学術大会において、同報告「僧侶の遊歴における地域寺社の意義―僧伝と古文書のあいだ」を行い、その準備過程で僧伝史料と古文書史料との間のズレを認識したこと、などの経緯がある。その後、大貫俊夫氏（現・領域代表）からの働きかけにより日本中世に関するプロジェクトを起ち上

げ、研究計画にもとづいた方法論を案出・提示した。

班の方法論としては、第一に地域寺社の古文書史料を軸に、寺社の構造と民衆との関係性を明らかにする。第二に古典籍資料の読解を進め、僧侶・神職による修行のあり方、彼らの移動と交流が介する寺社相互の関係性を明らかにする。第三に考古学・美術史分野の資料を活用し、また人の移動の経路を実地踏査して、その実態を明らかにする。

以上と平行して、他班と共同でその成果を持ち寄り、比較検討のための研究会を開催する他、いくつかの地域寺社を選定して、現地調査を実施する予定である。

他班と同様に、文献資料を扱う歴史学の研究者だけでなく、文学・美術・考古学を専門とする研究者を構成員とし、幅広い視点から宗教メディアの研究を進めている。現在までのところ、対面形式の研究会や現地調査などは実施できていないが、ほぼ隔月のペースでオンライン研究会を開催している（2020年10月～2022年1月、合計9回の開催）。



日本中世寺社：大峰山寺



日本中世寺社：称名寺



## 2021年度の活動

### ReMo研シンポジウム2021

#### 「東西中世における修道院・寺社の書物文化——制作・教育・世界観の変容」

本シンポジウムは、ReMo研の活動のうちもっとも重要なものとして位置づけることができる。2日間にわたり、報告者とプロジェクト関係者が会場である東京都立大学南大沢キャンパスに集い、コロナ禍が続くなか、多くの参加者にとって久しぶりの対面学術イベントとなり、大変有意義な議論と交流が行われた。また、あわせてzoomミーティングを活用して会場外とのコミュニケーション環境を確保し、のべ165名(1日目)、169名(2日目)が参加した。

本シンポジウムでは若手研究者支援の一環として報告者の公募を実施し、統括班による審査を経て5名の方々に報告の機会を提供し、交通費と宿泊費を支給した。ReMo研は若手研究者育成を一大使命として掲げており、今後も同様の営みを続けていきたいと考えている。

中近世の宗教運動(修道制や寺社)は、修道戒律、説教などの文書テキストのほか、文学作品、彩飾写本、聖堂装飾、あるいは巡礼などの仕組みも含め、多種多様な形態のメディアを駆使し、自らの宗教理念を発信していた。2021年度のシンポジウムでは、こうしたメディアのうちとくに書物文化に注目し、その制作現場、教育への活用、アイデンティティや世界観の変容に果たした役割にスポットライトをあて、ヨーロッパ史と日本史の比較を試みた。キーノートスピーチは『寺院文献資料学の新展開』シリーズを刊行中の中山一麿氏にお願いし、4つのセッションが展開された。報告の概要は以下の通りである。

12月18日(土)

キーノートスピーチ

中山 一麿(大阪大学)

「寺院経蔵の形成・継承・変容—蔵書の役割を視座として—」

日本の宗教文献、とりわけ寺院に所蔵される文献群はその地域の宗教運動を実証する資料と言える。それらはそこにあるべくして存在し、相互に関連した資料群である。既に使われていた場所から切り離されて巷間に流れた書物や大学図書館・博物館などに所蔵される書物とは、寺院所蔵文献群は文化資源としての価値も研究素材としての潜在力も大きく異なる。

本報告では、寺院文献の持つ潜在力を如何にして最大限引き出すか、その結果これまでの研究にどのような変化をもたらすか、といった視点から、安住院・木山寺・覚城院などでの蔵書調査の有様を例示した。そこからは、個別の典籍研究からは測り得なかった、書物が所在する史的背景、書物を介した人脈、地方と中央の関係性、寺院間の繋がりなど新たな事実や課題を生み出している。「書物」学は内容読解から「書物」の存在そのものを問いたす段階へと踏み出している。そしてそれは、より確かな内容読解へもフィードバックされるものである。

セッション1: 書物制作と世界観の変容(司会: 武田和久)

安藤 さやか(A01)

「西欧初期中世典礼書写本の装飾イニシアル—Te igiturとVere dignumのモノグラム化—」

本報告では、サクラメンタリウムのふたつの主要な装飾箇所である、叙唱のvere dignumと奉獻文のte igiturのイニシアルの造形分析を通して、西欧初期中世の典礼に於いて書物が担った役割を考察する。カロリング朝フランコ＝サクソン

派写本では、装飾イニシアルは十字架やイエスの名を想起させる象徴記号として機能する。この様式を受容したオットー朝期のコルヴァイ写本では、イニシアルは複雑に組み合わせられたモノグラムとなる。これは君主や教皇のモノグラムや、カリグラムによる祈祷文に範を得たものだろう。サクラメンタリウムの装飾イニシアルは、典礼の参加者に式文の権威を想起させ司式者自身に瞑想させる為の装置へと変容したのである。

長友 瑞絵(東京藝術大学)

「西欧中世の修道院と動物寓意テキストについて—Dicta Chrysostomi版フィシオログス写本の分析から—」

西欧中世のキリスト教的博物譚『フィシオログス』の写本のうち、11世紀頃に成立し、フランス東部からオーストリア南部に流布したDicta Chrysostomi(DC)と呼称されるヴァージョンの写本群から、ウィーン国立図書館Cod. Vind. 1010他を取り上げ、挿絵や写本構成の分析を行った。特に挿絵において、先行する別のヴァージョンの写本には見られない「ハイエナ」での抱擁する二匹のハイエナなど、性愛に関する行動を規制する表現が見られた。扱った写本はいずれもヒルザウ改革の影響が推測される修道院に由来することから、改革の理念を熟知した指導者により教育目的で編集され、挿絵も変化した可能性を指摘した。

阿部 晃平(立教大学)

「哲学の擬人化像の変容—13世紀のライブツィヒ写本を中心に—」

本報告では、13世紀にペガウのベネディクト会修道院で作成された写本(Leipzig, Universitätsbibliothek, MS 1253)に描かれている3人の擬人化された「哲学」について、各々の持つ目的や意義を分析した。これらの擬人化像は



皆ポエティウスの『哲学の慰め』にその淵源を持ちつつも、初期中世において為された註釈書の解釈——「哲学」とキリスト教の神との同一視——を多分に反映しつつ、各々が哲学の分類図や自由学芸の階梯を付带的に備えていた。同写本内に筆写されている蔵書目録からは、この写本自体が修道院における自由学芸教育の入門書として用いられていたことを示唆しており、擬人化という視覚的表象をもって、写本全体が初学者に対して修道院的な知的世界観を提示する役割を担っていたことを明らかにした。

## セッション2：書物文化とアイデンティティの変容①(司会：大貫 俊夫)

林 賢治 (A01)

「書物の受容と修道院のアイデンティティ——ゼッカウ修道院 (Stift Seckau) の書物係ベルンハルトの足跡 (1140-1184/85) を追って」

ゼッカウ修道院は、オーストリアのシュタイーマルク州にあった、アウグスティヌス律修参事会の修道院である。1140年に創立されたこの修道院は、1150年頃には女性を受け入れ、二重修道院となる。ゼッカウでは、ベルンハルトという人物が1184/85年まで書物係を務めていた。ゼッカウの71冊の12世紀写本のうち、32冊に彼の関与が確認できる。本報告では、彼が関わった写本群のうち、832番写本を取り上げ、この写本が二重修道院に対応したテキストを含んでいることを示した。そして、二重修道院に対応したテキストの創出においては、アウグスティヌス律修参事会、ベネディクト会というような修道院のアイデンティティを越えた、柔軟性があったのではないかと指摘した。

梶原 洋一 (A02)

「托鉢修道会のアイデンティティと書物」

説教・告解を通じた俗人に対する司牧活動を主たる使命として13世紀中に創設された托鉢修道会にとって、書物はその活動に欠かせざる知的なインフラであった。とはいえ、書物に対する態度について、各修道会で相違が見られたこともまた見逃せない。こうした問題意識のもと、本報告では主

要な托鉢修道会であるドミニコ会とフランシスコ会の法制史料を分析した。いずれの修道会においても、説教、司牧、そして学問という修道会の根本的な活動に書物が不可欠な役割を果たす一方で、高価な写本が有する経済的価値が、ドミニコ会においても實際上、さらにフランシスコ会では理念の上でも、清貧という修道会のアイデンティティを揺さぶる試金石となった。

川崎 剛志 (B01)

「聖地と日本仏教史の再創出—『金剛山縁起』の偽撰と受容—」

霊山の修行から得られる特別な力を、インドから中国を経て日本に至った正統な仏教の力とどう差別するのか、あるいはどう包摂するのかが、古代以来、日本仏教の重要な課題のひとつであった。大和国 (現在の奈良県) には二つの至聖の連峰があり、そのひとつ葛木峰の主峰が金剛山であった。『金剛山縁起』は、祖師役行者以来連綿と続く、歴代天皇と諸宗高僧による華々しい金剛山信仰史を偽装した書物で、鎌倉中期 (1200年代半ば) に大規模修造事業推進のため偽撰されたと推測される。その書物が山外でも受容され、諸書に引用された結果、鎌倉後期 (1200年代末) 以降、日本仏教史の構図と叙述が大きく塗り替えられた。



シンポジウム2021会場写真



## 2021年度の活動

12月19日(日)

セッション3: 書物文化とアイデンティティの変容②(司会: 赤江 雄一)

西川 雄太(慶應義塾大学)

「カテキズムの改変—ホプトン・ホール写本の『一般信徒のための教理問答』と読者層」

『一般信徒のための教理問答』(1357年)は、ヨーク大司教ジョン・ソーズビーがランベス司教令(1281年)を基本的枠組みとしてラテン語で著し、それをベネディクト会士ジョン・ゲイトリッジが英訳したキリスト教のカテキズムの手引書である。15世紀半ばに制作された中英語宗教・教化文学作品集「ホプトン・ホール写本」(慶應義塾図書館所蔵)に収録された『教理問答』には、アウグスティヌスに依拠した三位一体論の解説と『カトールの2行連句』からの引用句が独自に挿入されている。本報告では、これらの改変箇所が、読み書きのできる一般信徒の読者層を想定し、家庭内におけるカテキズム学習促進を意図したものであることを示した。

白川 太郎(A02)

「14世紀イタリアにおける守護聖人の多元的創造—マルゲリータ・ダ・コルトーナの『事績録』」

本報告は、女性贖罪者マルゲリータ・ダ・コルトーナ(1247-97)の『事績録』を事例として、都市共同体のアイデンティティ形成において守護聖人の伝記が果たした役割を検討した。事績録は、フランチェスコ会士ジュンタによって作成され、1306年に枢機卿より承認された。その背後には、一方には政治的独立とシニョリア体制を強化したい都市の思惑が、他方には生前から疑念の的だったマルゲリータへの崇敬を確立したいという都市・修道会共通の志向が存在した。ただし、事績録のテキストは、彼女の聖遺物管理権をめぐる都市と修道会の対立をも反映していた。事績録の承認は、都市共同体のアイデンティティ形成と、それを担う崇敬のヘゲモニー争奪の交差点に位置づけられよう。

上條 敏子(藤女子大学)

「マルグリット・ボレーはなぜ異端とされたのか」

ダンテにさきがけて俗語作品を残したマルグリット・ボレーは、元来はベギン共同体のリーダー格であったと目されているが、聖書の翻訳や写本工房における写本制作を行なったことでも知られる。本報告ではその唯一の著作『純なる魂たちの鏡』を取り上げ、愛を主題とするその思想世界をテキストに則して概観し、彼女に付与された性的イメージが、異端断罪を容易にするために意図的に歪められたものにすぎなかった可能性を示唆した。

荒木 文果(A02)

「巨大な装飾写本—ローマ、サント・スピリト・イン・サッシア病院「教皇シクストゥス4世の生涯」の壁画とフランシスコ修道会の絵画伝統との関係について」

本報告では、二大托鉢修道会の美術における競合意識について、建築、写本の挿絵、板絵、フレスコ画の作例を具体的に挙げながら紹介した。そのうえで、ローマのサント・スピリト病院の壁面に描かれたフランシスコ会出身の教皇シクストゥス4世の生涯を題材とするフレスコ画連作の制作動機として、ローマ市街地でのドミニコ修道会の活動拠点サンタ・マリア・ソブラ・ミネルヴァ聖堂の廻廊装飾に対するライバル心があった可能性を提案した。特定の書物のテキストやイメージが有する意味内容についての発表が多いなかで、本報告は、書物を想起させる視覚的媒体が托鉢修道会のなかで担っていた役割という新たな視座を提供できたように思われる。

セッション4: 世俗物語素材と教化(司会: 大貫俊夫)

山本 潤(A01)

「ドイツ語圏英雄伝承の教化素材化—ニーベルンゲン伝説およびディートリヒ伝説を題材に」

中世に至るまで口伝されてきた英雄の物語は、12世紀末以降書字文芸の素材となったが、その過程で宗教的文脈に



アッシジ、サン・フランチェスコ聖堂上堂正面(フランチェスコ会)、13世紀



アッシジ、サン・フランチェスコ聖堂下堂のステンドグラス、13世紀



取り入れられた。13世紀初頭にパッサウの司教の関与のもと成立した『ニーベルングの歌』では、続編が付け加えられることにより物語に黙示録的構造が付与され、英雄的倫理が宗教的悪徳の「傲慢」と重ね合わせられる。東ゴート王国のテオドリック大王から派生した英雄ディートリヒ・フォン・ベルンに関しては、聖職者による歴史叙述では異教の王として悪魔と結びつけられ批判的に語られる一方で、口伝の英雄譚由来の叙事詩ではその救済の可能性が示され、この二つの見解は中世末期に成立した「英雄本散文」において並列的に語られる。

#### 宗藤 健（観音ミュージアム）

「札所縁起の生成にみる在地権力と教説—佐白観音霊験譚を中心に—」

坂東三十三所のひとつ佐白山正福寺（茨城県）には、18世紀の案内記『三十三所坂東観音霊場記』に引く流布縁起（原本逸失）と、17世紀末葉の成立とみられる「常州茨城郡笠間佐白山縁起」の2系統の縁起が伝存する。前者には『神道集』や真名本『曾我物語』など東国の天台系唱導文芸にみられる殺生功德観が反映され、その生成にあたって中世の在地領主宇都宮氏の信仰が介在したことが想定される。

他方、後者は前者とモチーフを共有しつつも、徳川綱吉将軍期における在地の政治状況を反映した殺生忌避の傾向を示す。二つの佐白観音縁起の異同を通して、中近世移行期の巡礼地における世俗権力と寺家との相互関係をうかがうことができる。

#### パトリック・シュウェマー（A03）

「キリシタン資料の裏を読む」

排耶説法原稿、事実確認註記が付けられたキリシタン由来の日本殉教者伝、そして様々な排耶物語の原型を含む雪窓宗崔文書。両半球を繋ぐ商人資本と朝貢経済が併存する近世社会を統制する上での、大衆の内面性と現実認識を巡る情報戦争の貴重な資料である。これらは、棄教者から得られた内部情報に基づき「キリシタン国」を悪とする物語が綴られているだけではない。本発表ではこの資料に見られる聖人の俗伝、イベリア世界征服の精神が凝縮している騎士物語の引用、意外にも事実であった薬物貿易の告発にヒントを得て、宗門改と異端審問、ピカレスク小説と元禄文学、イエズス会の開祖伝とコロンブス交換という「近世化」を日西の現象として捉え直した。

## ReMo研シンポジウム2021

### 東西中世における修道院・寺社の書物文化

—制作・教育・世界観の変容—



中近世の宗教運動（修道院や寺社）は、修道規律、説教などの文書テキストのほか、文学作品、聖職学本、聖職書籍、あるいは巡礼などの仕組みや為め、多種多様な形態のメディアを駆使し、自らの宗教理念を発信していました。学術史研究領域研究（B）「中近世における宗教運動とメディア」世界認識・社会統合（ReMo研）は、こうしたメディアがいかに創造され、また社会に対してどのような影響的な世界認識と仕組みをもたらしたのかを比較研究しています。

2021年度のシンポジウムは、そうしたメディアのうち書物文化に注目し、その制作現場、教育への活用、世界観の変容に果たした役割を考察します。キーノートスピーチは、寺院文書資料の最新展開シリーズを刊行中の中山一樹氏が担当。セッション1「書物の制作と世界観の変容」、セッション2「書物文化に見る共同体の歴史」、セッション3「世俗物語素材と教化」の各セッションで、歴史学、美術史学、文学の各分野から報告があります。

※報告者公募について  
本シンポジウムは、若手研究者支援の一環で報告者の公募を実施します。詳細はプロジェクトHP（<https://religious-movements.com>）をご覧ください。

---

日時

**2021年12月18日（土）12:45～18:00**  
**19日（日）10:00～12:30**

---

場所

**東京都立大学**（東京都八王子市南大沢1-1）＋オンライン

---

プログラム（予定）

**キーノートスピーチ**  
中山 一樹（大阪大学）



**セッション1：書物の制作と世界観の変容**  
安藤 さやか（東京藝術大学）  
長友 瑞絵（東京藝術大学）

**セッション2：書物文化に見る共同体の歴史**  
川崎 剛志（筑波大学）  
林賢 治（フライング大学）  
梶原 洋一（京都産業大学）

**セッション3：世俗物語素材と教化**  
山本 潤（東京大学）  
シュウェマー・パトリック（武蔵大学）

参加申込  
<https://forms.gle/vJ3o6kggrh95AGeZ8>

お問合せ：<https://religious-movements.com/contact/>



主催：学術史研究領域研究（B）「中近世における宗教運動とメディア」世界認識・社会統合（ReMo研）202103、代表：大賀俊夫

後援：西中世学会





## 2021年度の活動

### ReMo研講演会シリーズ2021「中近世宗教史研究の最前線」

本講演会シリーズは、ReMo研の魅力を発信する重要な機会として位置づけることができる。各研究班が取り組む研究分野のトップランナーに登壇してもらい、日本とヨーロッパという二つの文化圏を視野に収め、歴史において宗教が果たした革新的・持続的役割について論じていただいた。

#### 第1回(9月29日) 上島 享(京都大学)

「日本中世史研究のあゆみとこれから—政治・社会・宗教—」

明治期以降の日本中世史研究の歩みを振り返りながら、どのように中世という時代や社会が認識されてきたのか、そして、今後の展望について考察した。検討対象としたのは、中央の研究動向からやや距離をおいた、ひとつのローカルな研究潮流である。結果、通説的な史学史とは異なる中世史研究のあゆみを示した。具体的には、中世という時期区分の成立・定着の過程、戦前の社会史研究と戦後歴史学との連続性、西洋史研究の動向との親和性などについて論じた。また、今後の課題については拙稿で述べた展望に肉付けをした。関連する拙稿として「中世総論」(『論点・日本史学』ミネルヴァ書房、近刊予定)、「日本中世の宗教史」(『日本宗教史I 日本宗教史を問い直す』吉川弘文館、二〇二〇年)を参照されたい。

#### 第2回(11月29日) 原 基晶(A02)

「新著『ダンテ論——『神曲』と個人の出現』をめぐって」

本講演会では、11月26日に出版された『ダンテ論：『神曲』と「個人」の出現』について、概略と研究上の意義について話した。本書は、ナショナルな文学史を超えた視点から、『神曲』とそれまでの中世文学とを分けるリアリズムがどのように生まれてきたのかを考察した。具体的には、ロマン主義が作り上げたイタリアのアイデンティティーとしてのダンテ像に代表される、現代の「ダンテ」に幾重にも塗り重ねられた煤のような歴史的堆積物を取り払い、歴史的事実を出発点に、不明な部分は不明なものとして扱う合理的手法でダンテの実像に迫り、『神曲』を再読する試みである。

その国民国家発足時に定まった「イタリア史の出発点としてのダンテ」という枠組みは、現代の歴史主義的研究においても強固に維持されている。そうしたダンテ研究のナショナルな枠組みを超えようとしたものにアウエルバッハの予型論があるが、登場人物の造形には、それでは説明しきれない個人としての存在感がある。つまりダンテは、タイプとしての生をおくる騎士や農民と異なり、多種多様な人生をおくる、都市住民の生をリアリズムで表現し、倫理的評価にかけた。しかしそこには、事物の背後に神の意志があるというアレゴリー的世界観があった。ゆえに、現実が存在するかのように描か

れた人物や事象——例えば空と海との照応と両者のなす水平線が円を描くこと——に、神による事物の創造とその調和的關係が読みとれるのである。

本書が解明した、『神曲』におけるリアリズムの背後にこういった世界観・宗教観が存在するという事実は、特にReMo研の「中近世における宗教運動とメディア・世界認識・社会統合」という研究テーマと関連する。

#### 第3回(2021年12月5日) 小俣ラポー日登美(A03)

「異端・偶像崇拜・暴君の共演—イエズス会と日本の宗教—」

本講演では、ヨーロッパのイエズス会演劇において鑑として登場する日本の信仰の描かれ方について分析した。2012-13年にかけて行ったスイスのルツェルン、エンゲルブルグでの調査で得た資料をもとに行った国際学会「異端とその宗教的言説」(2019年3月、名古屋大学・ヌーシャテル大学共同主催)での発表、および2020年に刊行した『ヨーロッパにおける日本宣教の殉教者—遠き「インド」から学校演劇まで(16-18世紀)—』(原文フランス語)の第5章で言及した内容を発展させたものとなる。具体的には、イエズス会人文文学教師ヤコブ・シェーンにより執筆され1638年に上演された『日本のキリスト教徒の闘い』という作品を分析した。本作品は、つとに複数の研究者により、ヨーロッパ近世で上演された日本殉教演劇の中でも、いわゆる「恐怖の劇場」の流れをくみ、残酷さの可視化の面では典型的な作品として捉えられてきた。ただしこれらの分析は、台本の内容や物語の典拠、作品の上演された時代背景を踏まえたものではなかった。今回、台本の来歴の検証や典拠となった刊本の特定、さらに上演を行った学院が宗派間闘争からの亡命者を積極的に受け入れていたことを指摘し、内容面から見ても、この作品が当時のヨーロッパにおける「異端」・「暴君」との戦いを、日本の「偶像崇拜」との戦いに仮託して描いていることを示した。

#### 第4回(2022年3月18日)

Emilia Jamroziak (University of Leeds)

“Constructing medieval monastic history in the 20th century and its legacy”

本講演ではシトー会研究の第一人者が登壇し、中世修道会研究のヒストリオグラフィーを中世から21世紀までたどった。



## ReMo研合同研究会2021

### 「科学、医療、宗教の相互連関——中近世のキリスト教と仏教を中心に——」

2021年9月15日(水)、zoomミーティング

ReMo研は研究班の垣根を超えた共同研究の推進を重視しており、この合同研究会はその第1弾である。古来、宗教者の中には専門的な知識・技術を習得し、これを実践する者たちがいた。そこで本合同研究会では、科学・医療分野において中近世の日本で活動した仏教ならびにキリスト教の宗教者とその思想を取り上げた。宗教運動は、マクロコスモスとしての外界とミクロコスモスとしての人体をどのように認識し、解釈し、社会に還元したのだろうか。2つの報告とそれぞれに対するコメントを紹介する。

小山 聡子(二松学舎大学)

#### 「日本中世の仏教と医療」

日本中世の貴族社会では、病気の治療は、僧、医師、陰陽師が担っていた。僧、医師、陰陽師のすべてが治療にあたる場合もあったものの、誰が主要な治療者となるかは病気の原因によって決められていた。たとえば、病気の原因がモノケ(多くの場合死霊を指す)の場合には僧が加持などによって治療し、疫神をはじめとする神が原因の場合には陰陽師が祭や祓を行い、腫物などの場合には医師が主な治療者となることが多かった。本発表では、僧と陰陽師による治療を中心に、具体的にどのような治療が行われたのか、さらにそれらはいかに変化していったのか、史料を示しつつ説明した。中世後期には、中国医学の影響が強くなり、病名や薬の数も増え、医師の役割が大きくなっていく傾向にある。本発表では、次第に医療と祈禱の両面で活躍する僧が目立つようになり、僧に医師としての役割も期待されていったことや、医師が医療に中心的に携わる事例が多くなっていくことを述べた。

#### ■ 苅米 一志(B01) コメント

日本中世の医療は現代医学の範疇を越え、精神の部分に大きく踏みこむものであった。その治療法は欧米の「悪魔祓い師」にも比すべきもので、この点で日本と欧米との比較が十分に可能であることが示されたと思う。



空海行道所といわれる我拝師山と出釈迦寺奥院

平岡 隆二(A03)

#### 「イエズス会科学と近世仏教—初中期仏僧の西洋地球説への反応を中心に—」

本発表では近世初中期日本の仏僧らが、イエズス会由来の大地球体説(地球説)に対してどのような反応を示したかについて、関連史料を整理・検討した。その結果、以下のような準備的な見通しを得た。すなわち、1) 先行研究では地球説に否定的な意見・反応に着目することが多かったが、実際には、須弥山説との折衷的・整合的理解を示した仏僧も多く存在した、2) その知的態度は、西洋説をその本来の文脈(イエズス会)から切り離し、自らに固有の文脈(仏教、両部神道等)で利用するようになる自己化appropriationのプロセスとして理解できる。また今後の課題として、さらなる一次史料の発掘・集積とその学問的・文化的コンテクストの追究、近世後期の梵曆運動との連続／非連続性の検討、などを挙げた。

#### ■ 岡田 正彦(B01) コメント

16世紀のイエズス会士による須弥山説批判への仏教側の反応について、新たな知見を得ることができた。また、近世日本の主な知の担い手であった、仏教僧たちの幅広い科学的知見とその役割を再確認する貴重な機会になった。



アクアマニーレ、13世紀、ドイツ、大英博物館蔵



## 2021年度の活動

### ReMo研公開セミナー 2021

#### 「アクアマニーレと典礼空間の形成」

2021年10月30日(土)、zoomミーティング

歴史、美術史、文学という人文学の主要ディシプリンがひとつの共通テーマに取り組む、という点に本プロジェクトの特徴がある。そこで、盛期中世ヨーロッパに普及したアクアマニーレ(水差し)に着目し、ひとつの「メディア」をめぐる人文学の協働の場を創出したいと考えた。アクアマニーレは、典礼中に手を洗うために用いられる水を入れる器(manile、vas manuale)、あるいは水を注ぐ水差し(urceus)である。この道具は、中世後期までに動物、なかでも獅子の頭部の象徴で装飾されるようになり、水を浄化し、その意匠の持つ力を媒介するという意味で、「メディア」と言い表すにふさわしいだろう。12～13世紀に大きく変容を遂げたアクアマニーレは、どのような価値観と世界認識の仕方を社会にもたらしたのだろうか。本公開セミナーでは観想修道会班の3人がそれぞれのディシプリンに基いて報告を行い、日本中世寺社班によるコメントから刺激を受けつつ、充実した議論を行うことができた。

金沢 百枝 (A01)

#### 「中世盛期のAquamanileの形態とその技法」

「アクアマニーレ」と呼ばれる青銅製の水差しは12世紀ドイツで誕生したとされる。獅子、竜、ケンタウロスなどから始まり、14世紀以降には「サムソンとライオン」や「アリストテレスとその妻」など複雑な造形へと進化した。発表ではその多様さを概観した後、戦利品としてイスラーム圏でつくられた類似品との比較や、金属組成の比較から成立過程について論じた。蠟型鑄造技法を用いた立体彫刻は、古代以降、中世においては廃れていたとされるが、ヒルデスハイムの柱や青銅扉の取手など、12世紀以前にも立体的な青銅作品が制作されており、イスラーム圏からの輸入などで渴望が高まったところ、12世紀、ザクセンでの銅鉱山の発見と相まってアクアマニーレがドイツで多く制作されたのではないかとという予備的な研究を報告した。

大貫 俊夫 (A01)

#### 「シトー会におけるアクアマニーレと典礼の危機——『シトー会大創建史』の検討を中心に」

本報告は、シトー会修道院では水が実用面においても典礼面においてもきわめて重要だったことを確認したうえで、12世紀末から13世紀初頭にかけて著され、『シトー会大創建史 Exordium Magnum Cisterciense』を取り上げ、アクアマニーレがシトー会典礼において中心的な位置を占める聖具だったことを検証した。シトー会は傘下修道院の間で聖具や典礼書を共有し、典礼の統一を指向していた。しかしその一方で、修道士の中にはアクアマニーレが深く関わる聖体拝領の意味を理解・受容できない者もいた。また、助修士はミサに能動的に参画することができなかった。統一を指向する修道会と、その達成を困難にする構成員とのあいだの緊張関係。この緊張関係を克服することが『シトー

会大創建史』上梓の目的の一つだったのではないかと結論づけた。

山本 潤 (A01)

#### 「中世俗語文芸における「水を灌ぐ」行為—ハルトマン・フォン・アウエ『イーヴェイン』を題材に」

中世盛期俗語文芸には、宴の際に「水差し」から手に水を灌ぎ、それを盥で受ける洗手の場面が散見されるが、これは穢れの浄化と共に宮廷的な礼節と文化の空間への移行儀式としての意味を持つ。ハルトマン・フォン・アウエ『イーヴェイン』では、泉の傍らの桶状の石に「水差し」から水を灌ぐ行為が描かれ、それはケルト的異界空間への通路を開く。この行為は宴の際の洗手と同様の構図を持つものの、「手が洗われない」ことにより、穢れの浄化や宮廷の礼節の付与というような文脈は捨象され、「水を灌ぐ」という行為およびそこで灌がれる「水」が元来的に有している空間越境性が前景化しているものと思われる。

菊米 一志 (B01) コメント

#### 「中世寺社をめぐる水環境と儀礼」

真言密教においては、人間を「水瓶<sup>すいびょう</sup>」に見立て、師弟間の伝授は「灌頂」と呼ばれる。儀礼の冒頭においては、水と火を対比・結合させることで場を浄化する所作がなされる。これらはインド由来のものであるが、諸報告で提示された文物からすると、ヨーロッパにも影響を与えた可能性があり、特に中東地域では水差しがどのような形態で、それをめぐりどのような儀礼が見られるのか、非常に興味をそそられた。



## 研究会活動

### 観想修道会班

2020年度は、研究代表者と分担者が本プロジェクトで取り組む研究課題を紹介した。

2021年度は、研究代表者、分担者に加え研究協力者も報告を行った。各報告の内容は以下の通りである。

#### ● 第1回 (2021年7月2日)

大貫 俊夫「ポスト・ベルナル期シトー会における典礼危機」

典礼に関わる危機意識がシトー会および個々の修道士共同体における典礼にまつわる危機意識に関して、シトー会で12世紀末から13世紀初頭にかけて成立した『大創建史』、『ベネディクトゥス戒律註解』、『奇跡についての対話』、ラングハイムのエンゲルハルトの『例話の書』を検討した。

#### ● 第2回 (2021年7月30日)

安藤 さやか「西欧初期中世の典礼書写本の装飾イニシアル―様式展開と典礼における機能―」

ミサで司式者が用いるサクラメンタリウム写本は、8世紀後半以降、叙唱と奉獻文の二箇所が彩飾で強調された。カロリング朝期の作例には、キリストの犠牲を想起させる磔刑図やミサの図像が描かれる作例も散見されるが、最も多いものが全頁大の装飾イニシアルである。本報告では、近年の研究 (Hamburger 2016; Garipzanov 2018他) を踏まえ、サクラメンタリウムの装飾頁の類型化を通して、装飾イニシアルの機能とその変遷を考察する。

#### ● 第3回 (2021年8月26日)

片山 幹生「典礼から演劇へ―中世典礼劇と修道院共同体」

典礼劇は、典礼の枠組みのなかで、あるいは典礼の周辺で教会内で演じられていたラテン語の対話体の歌唱劇であり、聖歌の内容をパラフレーズしたトロプスを起源とする。研究報告では三人のマリアの聖墓訪問の場面を題材とする対話体トロプスが劇的ダイアローグに変容していく様子をいくつかの事例とともに説明したのち、聖母訪問の前後の場面が自由に拡大され、ラテン語で歌われているものの、その内容は典礼から離れた自立した演劇性を獲得しているように見えるテキストを紹介した。

#### ● 第4回 (2021年12月22日)

北館 佳史「シトー会の例話集にみる死の典礼と共同体」

シトー会クレルヴォー修道院で編纂された例話集に収録された死の典礼に関する話に基づいて瀕死者・死者と共同体との関係を考察した。典礼に関する話において死者への配慮と執り成しの祈りの義務が説かれ、典礼秩序の維持の重要性が語られていた。また、聖ベルナルの時代の共同体が想起され、修道会の霊的卓越性が主張されていた。こうした話を語ることには共同体のアンデンティティを確認し、結束を強化する意味があったと考えられる。

菊地 重仁「カロリング期における修道者共同体の維持・強化と共同体の危機」

報告者は「典礼空間の形成」という観想修道院班の研究テーマを踏まえ、その空間を占める典礼共同体としての修道者共同体の形成・維持・再生の様態を、カロリング期フランク王国の事例を通じて

分析している。本報告では西フランク王国の逸名女子修道院で起こった姦通事件・修道院長位篡奪未遂事件という共同体の危機に焦点を当て、教会会議の場での裁判の様相を分析した。そこでは司教たちが、修道女たちを罰すること以上に、共同体の中心たる修道院長の権威を回復させることに腐心していたことを明らかにした。

#### ● 第5回 (2022年3月14日)

三浦 麻美「オーバーヴァイマルのルカルディス伝から見る女子修道院と「典礼空間」」

オーバーヴァイマルのルカルディス (1269年頃～1309年) は、神聖ローマ帝国東部のシトー会女子修道院でほぼ全生涯を送り、その聖人伝は聖痕ゆえに身体史の観点から注目されてきた。これに対し、本報告はルカルディスを取り巻く人々に着目し、修道院共同体や聴罪司祭らがルカルディス崇敬の共有を通じて形成した虚実入り混じる空間をめぐる言説が存在したことを指摘した。

林 賢治「11-12世紀の修道院／教会改革と「二重修道院」

本報告では、初期中世の修道院における両性の共住形態と、盛期中世のそれとを二重修道院という同一の言葉で表現しようという、従来の二重修道院研究が持つ問題点のひとつを指摘した。そして、従来二重修道院とされている盛期中世の修道院について、その構成員に修道士、俗人兄弟、修道女というような多様性が確認できる場合には、二重修道院という言葉は適切でないのではという推測を、年代記を中心に分析することで示した。

### 托鉢修道会班

プロジェクトがスタートした2020年度は、メンバー同士でプロジェクトの趣旨を理解し、互いの理解を深める目的から、3月10日に研究会を実施した。

2021年度は12月4日に研究会を実施した。研究分担者の荒本文果が以下の報告を行い、質疑では活発な議論が交わされた。

荒本 文果「ローマ、サント・スピリト病院《シクストゥス4世の生涯》壁画の特異性と二大托鉢修道会に関わる美術作品との関係について」

ローマのサント・スピリト病院には、教皇シクストゥス4世の生涯の逸話を中心に描いた44場面からなるフレスコ画連作がある。伝来する関連史料が乏しく、保存状態も悪いことから、本壁画に対する美術史的な観点からの研究は困難を極めてきた。今回の報告は、本邦ではじめて、この連作の基本的な情報を紹介する試みであった。さらに、壁画の視覚的な特徴として、装飾写本を思わせる画面構成、繰り返し登場する教皇の肖像の存在に注目し、同様の視覚効果を狙った美術作品が、ドメニコ会のローマ市街地における活動拠点であったミネルヴァ聖堂第一廻廊に確認されることを指摘した。そして、この一致は単なる偶然ではなく、フランシスコ会士であった教皇のドミニコ会に対する競合意識と関連付けて考えうる可能性を新しく提言した。

### イエズス会班

本研究は2020年10月に採択され、研究代表者ならびに研究分担者が一堂に集う会合を同年12月20日にオンラインで開催した。冒頭



## 2021年度の活動

で代表の武田より、イエズス会班に属する研究者が今後研究を進めて行く際の留意点について説明があり、続いて研究分担者（浅野、折井、平岡、シュウェマー）がそれぞれ、本研究をつうじて取り組んでいく課題の概要について簡潔に報告した。

2021年度はオンライン研究会を適宜実施、本科研の全体テーマに即したかたちで班員の一部分から個人発表を行ってもらい意見交換した。発表の要旨は次のとおりである。

### ● 第1回（2021年5月27日）

武田 和久「イエズス会的服従と現地改宗エリート（知識人）の誕生」

イエズス会会員に遵守が強く求められていた「服従」概念が教理教育を通じて一般信徒にも同じく求められるようになり、この要請に順応できた信徒が、例えば16-17世紀の日本では同宿や助修士として、あるいは同時期のスペイン領南米では「エリート先住民」として、イエズス会士が推進した宣教活動の協同者となって多大に貢献したことを指摘した。

### ● 第2回（2021年6月24日）

浅野 ひとみ「ザビエルのもたらした信仰具」

16世紀以降の日本に将来されたキリスト教信仰具にはどのようなものがあつたか、宣教師の書簡や実際の発掘品・伝世品から推察されることがこれまで検証無く引き継がれて来たものの、ヨーロッパにおける金属（特に真鍮）の安定生産、アジアにおける信仰具マーケットの成長を視野に再検討する必要があることを指摘した。

### ● 第3回（2021年9月3日）

折井 善果「フランス国会図書館蔵『サントスの御作業』（1591年）について」

キリシタン版『サントスのご作業』に関する研究を取り上げ、従来二つの原本が使用されてきたが、フランス国会図書館には、東洋学者ルイス・ピケ（Louis Piques, 1637-1699）の旧所蔵である、第三の刊本が存在することを取り上げ、あわせてその基本的書誌、プロベナンス、三校本の異同について考察を行った。同書と成立時期を前後し、内容も重複する、いわゆる「バレット写本」との関わりについて、参加者から貴重な示唆を得た。

アンドレス・メナチェ「ザビエルから雪窓へ」

イエズス会士と仏僧双方の宗教的他者像の形成とその発展に焦点をあてた。日本に渡来したイエズス会士たちは日本宗教について初めて詳細な記録を遺したが、彼らはとりわけ、当時の日本社会において高い地位を有した日本仏教とその代表たる僧侶たちを詳しく分析し、布教活動の敵として描くことが多かった。一方、僧侶等は江戸時代初期の反キリシタン書においてキリスト教やキリシタンを邪なものや「外道」の教えとして描いたことを発表の中で指摘した。

### ● 第4回（2021年11月11日）

石川 博樹「イエズス会エチオピア布教の概要と近年の研究状況」

イエズス会が1550年代から1630年代にかけて、アフリカ北東部に位置するエチオピアの高原部において行った布教活動について報告し、非カルケドン派キリスト教徒を対象とするこのイエズス会エチ

オピア布教の概要について解説するとともに、近年の研究動向や関連史料の刊行状況について、自身がこれまでに行った研究内容も含めて紹介した。

### ● 第5回（2022年1月13日）

岡田 正彦「19世紀の日本における仏教天文学と仏教科学」

梵暦運動とは、西洋自然科学の知識が広まった19世紀の日本において、地動説を含む近代的宇宙論に対抗して、須弥山を中心とする円盤状の宇宙論を展開した仏教系の思想運動である。当日は、各地で私塾を開いたり、仏暦を頒布したり、各宗派で暦学を講義したりしながら、天文学から占星術、医学の領域にまで及ぶ広範な活動を展開した彼らの足跡を紹介し、近世日本における学知の担い手としての僧侶の役割について考察した。

### 日本中世寺社班

日本中世寺社班では、2020年10月からほぼ隔月で研究会を開催してきた（班の構成は、研究分担者5名、協力者5名）。第1回から第4回にかけては、研究分担者・協力者から自己紹介と研究内容の解説をしてもらい、相互の理解を深めた。この他、特に第1回では、今後の活動方針や最終目標などについて審議した。第5回以降は、欧米との比較を進めるため、「寺社の属性マトリックス」のフォームを提示して、それぞれ研究対象とする寺社の紹介を行っている。

「寺社の属性マトリックス」は、以下のような項目から成る。1. a 立地環境、b 建立の契機、c 建築物と用途、2. a 主要な信仰財と用途、b 主要な儀礼と目的、c 主要な修行日課、3. 僧侶身分の特質と傾向、4. 他主体との関係。特定の寺社について各項目を記入し、特にヨーロッパの修道院と比較することを目的としている。

一般的傾向として、飛鳥～奈良時代（6～8世紀）に建立された寺社、特に寺院は近畿地方を除き、そのほとんどが9世紀には衰退または廃絶する。10世紀末期以降、藤原摂関家による大規模な仏教興隆事業を契機として新たに寺院が建立されるが、そうした寺院は自身の由来と沿革を語る縁起という史料において、故意にその建立の年代を遡らせようとした。例えば、備前国（岡山県東部）では四十八にものぼる寺院が「報恩大師」という僧侶により、奈良時代なかばに建立されたとされている（実際には虚構）。この他、立地条件はどちらかというと山地になる傾向があり、そうした山地に住む地主神から僧侶が土地の譲渡を受けて、寺院が建立されたという伝承をもつものも多い。こうした点については、ヨーロッパの修道院の成立をめぐる事情とも比較が可能になってくると考えられる。

この他、第7回（2021年9月25日）には守田逸人から讃岐国普通寺の所蔵文書をめぐる報告、第8回（2021年11月19日）には千枝大志から伊勢参詣曼荼羅や伊勢御師をめぐる報告がなされた。いずれも地方における史・資料に注目したものであり、前者ではいわゆる「普通寺文書」とされるものが、近世・近代にわたる長い時間をかけて、また複雑な過程を経て成立してきたものであること、後者では寺社境内図や古文書史料の見直しを通じて、伊勢信仰が社会のさまざまな領域に影響を与えていることが紹介された。



## 2020～2021年度業績一覧

### A01 観想修道会班

#### ●論文

- 安藤さやか(単著):「カロリング朝期写本のお物語イニシアル——基礎資料と研究動向——」、『千葉大学人文研究』51(2022)、123-148頁
- 片山 幹生(単著):「タイトルに見る『葉陰の劇』の重層性」、『Études françaises』28(2021)、1-19頁
- 金沢 百枝(単著):「行為の詩学 アルフレッド・ジェルを手がかりに」、『Art Anthropology』17(2022)、53-56頁
- 菊地 重仁(単著):「記録を残し記憶が残る:カロリング期の史料と中世におけるカロリング期にまつわる過去の想起」、『西洋中世研究』12(2020)、2-18頁
- 北館 佳史(単著):「12世紀のシトー会シルヴァネス修道院の歴史叙述における起源の記憶」、『人文研紀要』96(2020)、1-27頁
- :『オバジューヌの聖エティエンヌ伝』試訳(2)、『紀要』(中央大学文学部)281(2020)、77-100頁
- :「聖トマス・ベケットの約束と巡礼地の誕生:ポンティニーの聖エドモンド崇敬をめぐる論争」、『人文研紀要』98(2021)、185-208頁
- :『オバジューヌの聖エティエンヌ伝』試訳(3)、『紀要』(中央大学文学部)286(2021)、39-63頁
- 三浦 麻美(単著):「呪詛ではなく祝福を——マンスフェルト伯家と家門修道院ヘルフタに見る13世紀末の紛争と和解——」、『西洋中世研究』12(2020)、128-143頁

#### ●書籍

- 安藤さやか(分担執筆):石田勇治編『ドイツ文化事典』、丸善出版、2020年(担当:「カロリング期の美術」、448-449頁)
- 大貫 俊夫(分担執筆):金澤周作他編『論点・西洋史学』、ミネルヴァ書房、2020年(担当:「中世修道会」、88-89頁)
- :石田勇治編『ドイツ文化事典』、丸善出版、2020年(担当:「ドイツ地域の中世」、78-79頁、「修道院」、80-81頁)
- :高山博・亀長洋子編『中世ヨーロッパの政治的結合体:統治の諸相と比較』、東京大学出版会、2022年(担当:「総説 教会と修道会」、283-290頁[藤崎衛と共著])
- :高山博・亀長洋子編『中世ヨーロッパの政治的結合体:統治の諸相と比較』、東京大学出版会、2022年(担当:「盛期中世における修道会ガバナンス——シトーとクリュニーの修道会化と巡察制度——」、359-382頁)
- (監訳):ウィンストン・ブラック/大貫俊夫監訳『中世ヨーロッパ ファクトとフィクション』、平凡社、2021年
- (共訳):西山雄二編『いま言葉で息をするために:ウイルス時代の人文知』、勁草書房、2021年
- 片山 幹生(分担執筆):小森謙一郎他編『人文学のレッスン:文学・芸術・歴史』、水声社、2022年(担当:「日本のアマチュア演劇の多様な世界」、171-190頁)
- :日比野啓編『地域市民演劇』の現在—芸術と社会の新しい結びつき、森話社、2022年(担当:「赤門塾演劇祭—学習塾を母胎とする演劇創造」、81-101頁)
- 金沢 百枝(分担執筆):『フランスの歴史を知るための50章』、明石書店、2020年(担当:「フランスのロマネスク」、49-55頁)
- 菊地 重仁(単著):*Herrschaft, Delegation und Kommunikation in der Karolingerzeit. Untersuchungen zu den Missi dominici (751-888)* (Monumenta Germaniae Historica Hilfsmittel 31), Wiesbaden: Harrassowitz, 2021.
- (分担執筆):高山博・亀長洋子編『中世ヨーロッパの政治的結合体:統治の諸相と比較』、東京大学出版会、2022年(担当:「総説—大陸ヨーロッパにおける政治的結合体とその統治」、121-129頁[加藤玄と共著])
- :高山博・亀長洋子編『中世ヨーロッパの政治的結合体:統治の諸相と比較』、東京大学出版会、2022年(担当:「『恩恵』の剥奪:フランク諸王の統治における『威嚇』行為に関する一考察」、131-150頁)
- :『フランスの歴史を知るための50章』、明石書店、2020年(担当:「フランクシア」から『フランス』へ:『フランク人』小史、22-28頁)
- :『750年 普遍世界の鼎立(歴史の転換期3)』、山川出版社、2020年(担当:「第2章:西方キリスト教世界の形成」、79-131頁)
- 林 賢治(分担執筆):甚野尚志編『疫病・終末・再生:中近世キリスト教世界に学ぶ』、知泉書館、2021年(担当:「二重修道院における身体的隔離と霊的共住」、269-289頁)
- 三浦 麻美(単著):『「聖女」の誕生—テューリンゲンの聖エリーザベットの列聖と崇敬—』、八坂書房、2020年
- (編著):『歴史の中の個と共同体』、中央大学出版部、2022年(担当:「まえがき」、「ヘルフタのゲルトルート」、111-133頁)
- 山本 潤(分担執筆):石田勇治編『ドイツ文化事典』、丸善出版、2020年(担当:「ニーベルンゲン」、380-381頁)

#### ●研究発表・講演

- 安藤さやか:“Das Erbe der karolingischen Initialenornamentik: Zierseiten der illuminierten Handschriften aus Corvey,” Interdisziplinärer Workshop “Die mittelalterliche Bibliothek der Reichsabtei Corvey. Bestände, Forschungsstand, Perspektiven,” Universität Marburg (オンライン), 2021年5月27日
- :「西欧初期中世典礼書写本の装飾イニシアル——Te igiturとVere dignumのモノグラム化——」、Remo研シンポジウム2021「東西中世における修道院・寺社の書物文化——制作・教育・世界観の変容」、東京都立大学/オンライン、2021年12月18日
- 大貫 俊夫:「シトー会における歴史叙述と典礼—研究の方針を中心に—」、ReMo研A01班研究会、オンライン、2020年12月15日
- :「シトー会におけるアクアマニールと典礼の危機——『シトー会大創建史』の検討を中心に—」、ReMo研公開セミナー 2021「アクアマニールと典礼空間の形成」、オンライン、2021年10月30日
- :「13世紀初頭におけるシトー会による書物編纂と典礼の危機」、ReMo研A01班2021年度第1回月例研究会、オンライン、2021年7月2日
- :“The Crisis of the Cistercian Order and Liturgy on the Eve of the Fourth Lateran Council,” Research Seminar Series 2022, Institute for Medieval Studies, University of Leeds, オンライン、2022年1月25日
- 金沢 百枝:“The Reception of Medieval Art in Japan: the Romanesque as the art of supreme beauty for Soetsu Yanagi,” International Conference “Using the Past: The Middle Ages in the Spotlight,” オンライン、2020年12月8日
- 片山 幹生:「中世演劇は存在するのか?—「遊び(jeu/play)」としての中世フランス演劇—」、岸井大輔ブレイン企画・日仏演劇協会主催講演会、2020年8月19日
- :「西欧演劇のあけぼの—中世典礼劇のドラマツルギーと音楽について—」、日仏演劇協会オンライン・レクチャー、2020年10月30日
- :「学習者の「なぜ?」に答える、「なぜ?」を引き出す—フランス語教員のための歴史文法」、日本フランス語フランス文学会 2020 年度秋季大会ワークショッププログラム、2021年10月25日
- 片山幹生、鈴木理映子、畑中小百合:「〈シンポジウム〉いま、臨界点にある演劇「現代版組踊」から、演劇と地域、教育、産業を考える」、日本演劇学会2021年全国大会、名城大学(オンライン開催)、2021年6月27日
- 立花史、片山幹生、矢頭典枝、Olivier Ammour-Mayeur:「l'écriture inclusive 再論」、日本フランス語フランス文学会2021年春季大会、上智大学(オンライン開催)、2021年5月23日
- 片山 幹生:「ハーブと貴婦人—ギヨーム・ド・マショール『ハーブの賦』について—」、日本フランス語フランス文学会2021年春季大会、上智大学(オンライン開催)、2021年5月23日
- 金沢 百枝:「フランス中世の写本挿絵とロマネスク彫刻 ヨーロッパの古層からの遠いこだま」、芸術人類学研究主催シンポジウム第9回「土地と力」、2011年11月27日
- 菊地 重仁:「海域世界の中のカロリング帝国」、第70回日本西洋史学会大会小シンポジウム「中世北ヨーロッパにおける海域ネットワーク、島嶼、政治権力」、大阪大学(オンライン開催)、2020年12月12日
- :“Vorstellungen der maritimen Welten in den karolingischen Geschichtsschreibungen,” Forschungskolloquium zur Geschichte der Spätantike und des Frühmittelalters, Freie Universität Berlin, 2021年1月12日



# 2020～2021年度業績一覧

- 菊地 重仁：「Empire Surrounded by Seas: Carolingian Images and Perceptions of the Sea,」Premodern Mediterranean Seminar, University of Southern California Dornsife, Center for the Premodern World, オンライン, 2021年4月28日
- ：「Authorities and Consensus Building in the Carolingian Monastic World: in a Case of a Conflict,」Authority and Consent in Medieval Religious Communities, Faculty of Croatian Studies, University of Zagreb, Projekt: "Klöster im Hochmittelalter" [Sächsische und Heidelberger Akademie der Wissenschaften]), 2021年10月28日
- ：「Briefe der Geistlichen in der Karolingerzeit: Zwecke und Funktionen,」国際シンポジウム「中世社会と書状—文書実践の日欧比較—」, オンライン, 2022年3月11日
- 林 賢治：「Climate and Life in the Hirsau Monasteries,」International Medieval Congress, Leeds, 2021年7月5日
- ：「12世紀の二重修道院における慣習律テキストの創出—書物係たちの試み—」, ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所第33回研究会, オンライン, 2021年12月26日
- ：「書物の受容と修道院のアイデンティティ—ゼッカウ修道院 (Stift Seckau) の書物係ベルンハルトの足跡 (1140–1184/85) を追って—」, ReMo研シンポジウム2021「東西中世における修道院・寺社の書物文化—制作・教育・世界観の変容—」, 東京都立大学／オンライン, 2021年12月18日
- 三浦 麻美：「ヘルフタのゲルトルート—女子修道院における執筆活動の意味—」(ポスター発表) 西洋中世学会第12回大会, オンライン, 2020年10月4日
- ：「メヒルトからゲルトルートへ—ヘルフタ修道院におけるlittera—」(ポスター発表) 西洋中世学会第13回大会, オンライン, 2021年6月20日
- ：「Negotiating with the Neighbor: Helfta and Count Mansfeld at the End of the 13th Century,」Cistercian Worlds, オンライン, 2021年7月2日
- ：自由学芸から神学へ—中世盛期女子修道院における回心—, 西洋史研究会大会, オンライン, 2021年11月20日
- 山本 潤：「怒りzorn」と「敵意haz」—中世叙事文学に見る感情の表象するもの— 西洋中世学会第12回大会シンポジウム「中世における感情」、慶應義塾大学 (オンライン), 2020年10月4日
- ：「ドイツ」国民叙事詩?—オーストリア文学史叙述における『ニーベルンゲン之歌』、戦後オーストリア文学研究会第2回コロキウム, オンライン, 2021年3月21日
- ：「中世俗語文芸における「水を灌ぐ」行為—ハルトマン・フォン・アウエ『イーヴェイン』を題材に—」, ReMo研公開セミナー 2021「アクアマニールと典礼空間の形成—」, オンライン, 2021年10月30日
- ：「ドイツ語圏英雄伝承の教化素材化—ニーベルンゲン伝説およびディートリヒ伝説を題材に—」, ReMo研シンポジウム2021「東西中世における修道院・寺社の書物文化—制作・教育・世界観の変容—」, 東京都立大学／オンライン, 2021年12月19日

## ●短報・書評・アウトリーチ

- 安藤さやか (単著)：『「聖ルベルトゥスの詩編」 Psalterium Sancti Ruperti, Salzburg, Stiftsbibliothek, St. Peter, Cod. a 10』、『東京芸術大学西洋美術史研究室紀要 (Aspects of Problems in Western Art History)』18 (2020)、74–76頁
- 大貫 俊夫 (単著)：「中世ベストのもたらしたもの」、『しんぶん赤旗』、2020年9月8日
- (共訳)：東京都立大学西洋中近世史ゼミ訳「ブルース・M・S・キャンベル『大遷移—後期中世世界における気候・疫病・社会』より第1章」、『人文書報 (歴史学・考古学)』49 (2021)、29–66頁
- (単著・書評)：「河内祥輔、小口雅史、M・メルジオヴスキ、E・ヴィダー編『儀礼・象徴・意思決定—日欧の古代・中世書字文化—』——西洋史の側から——」、『国際日本学』19 (2022)、142–153頁
- (取材協力)：「マンガが誘う歴史ロマン」、日本経済新聞、2021年9月
- (監修)：ギンター・テメス著／森本智子他訳『ピア・マーズ—ビールに魅せられた修道士』、サウザンブックス社、2021年
- (講師)：「暗黒の」ヨーロッパ中世：虚構と現実」、神奈川県立川和高等学校、2021年6月
- ：「中世ヨーロッパにまなぶ1 / ファクトとフィクション1 / 中世は「暗黒」か?」、新潮社・青花講座、2021年9月
- ：「中世ヨーロッパにまなぶ2 / ファクトとフィクション2 / 科学 vs 宗教?」、新潮社・青花講座、2021年10月
- ：「中世ヨーロッパにまなぶ3 / ファクトとフィクション3 / 修道士の生活」、新潮社・青花講座、2021年11月
- ：「つくられた中世ヨーロッパ ファクトとフィクション」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2022年2月7日
- (出演)：せんだい歴史学カフェ第112回放送「『中世ヨーロッパ ファクトとフィクション』を語る」、せんだい歴史学カフェ、2021年11月
- 金沢 百枝 (単著)：「ロシアアイコンとロマネスクの扉」、『工芸青花』15 (2020/11)、124–128頁
- ：「フランス・ロマネスク美術の愉しみ」、『approach』Spring 2021、14–15頁
- (テレビ出演)：NHK、Eテレ『思考ガチャ』(「ロマネスク美術はなぜカッコいいのか」) 2021年9月10日
- (講師)：「キリスト教美術をたのしむ旧約編」65「ダビデ」、新潮社・青花講座、2021年4月8日
- ：「キリスト教美術をたのしむ旧約編」66「ソロモン」、新潮社・青花講座、2021年5月20日
- ：「キリスト教美術をたのしむ旧約編」67「ヨブ 魂の叫び」、新潮社・青花講座、2021年6月17日
- ：「キリスト教美術をたのしむ旧約編」68「ダニエルとヨナ」、新潮社・青花講座、2021年7月15日
- ：「キリスト教美術をたのしむ旧約編」69「旧約聖書の女性たち」、新潮社・青花講座、2021年8月12日
- ：「キリスト教美術をたのしむ旧約編」70「雅歌」、新潮社・青花講座、2021年9月16日
- ：「キリスト教美術をたのしむ旧約編」71「バイユーのタビスリー」、新潮社・青花講座、2021年10月14日
- ：「キリスト教美術をたのしむ旧約編」72「受胎告知」、新潮社・青花講座、2021年11月18日
- ：「キリスト教美術をたのしむ旧約編」73「後端」、新潮社・青花講座、2021年12月23日
- ：「キリスト教美術をたのしむ旧約編」74「東方三博士の礼拝」、新潮社・青花講座、2021年1月14日
- ：「キリスト教美術をたのしむ旧約編」75「エジプト逃避」、新潮社・青花講座、2021年2月10日
- ：「ロマネスク美術革命」4「ロマネスク建築の魅力」、新潮社・青花講座、2021年3月11日予定
- (展覧会コラボレーション)：新潮社・工芸青花ギャラリー「豊永盛人の沖繩旧約聖書」(張り子作家豊永盛人とコラボレーション)、2021年9月24–28日
- ：芸術人類学研究所主催「旅と書物 空間と時間の隔たりを超えて」、多摩美術大学八王子図書館・アーケードギャラリー、2021年11月19–27日
- 三浦 麻美 (単著・新刊紹介)：「Caroline Walker Bynum, Dissimilar Similarities: Devotional Objects in Late Medieval Europe」、『西洋中世研究』13 (2021)、131–132頁
- ：現在地を知る手がかり—「新しい歴史学」にジェンダー史がもたらしたもの—『週刊読書人』2022年2月18日号、6頁

## A02 托鉢修道会班

### ●論文

- 赤江 雄一 (単著)：「環境史の鍵概念としての主観性と史料探索の今」、『史学』89:1-2 (2020)、137–145頁
- 荒木 文果 (単著)：「Filippino Lippi in the Brancacci Chapel」、慶應義塾大学日吉紀要『人文科学』36 (2021)、1–26頁
- 梶原 洋一 (単著)：「中世ドミニコ会における修学のための移動」、『歴史学研究』1012 (2021)、31–40頁
- 駒田亜紀子 (単著)：『十三世紀フランス語聖書』(Bible française du XIIIe siècle) 彩写本研究：オクスフォード、クライスト・チャーチ図書館所蔵『新約聖書』におけるヨハネ伝抄について、『実践女子大学美術学術学』36 (2022)、1–15頁
- 白川 太郎 (単著)：「福音的イタリア」とリソルジメント：自由主義期のヴァル派牧師エミリオ・コンパとその歴史叙述、『史観』184 (2020)、72–98頁



白川 太郎 (単著) : 「グリエルマとマイフレダの異端: 13世紀末ミラノにおける信仰・政治・社会」、『西洋史学』271 (2021)、1-21頁  
: 「故郷における預言者: キアラ・ダ・モンテファルコをめぐる崇敬・対立・権力」、『西洋中世研究』13 (2021)、79-99頁  
: 「アポストリ研究の諸前提: 史料論と研究史」、『西洋史論叢』43 (2021)、73-92頁

## ●書籍

赤江 雄一 (共編著) : 赤江雄一・岩波敦子編『中世ヨーロッパの伝統—テキストの生成と運動—』、慶應義塾大学出版会、2022年 (分担: 「はじめに」、  
「西洋中世における説教書書の伝統生成—説教書は制度的ジャンルか」、1-35頁)  
梶原 洋一 (分担執筆) : 中野隆生・加藤玄編著『フランスの歴史を知るための50章』、明石書店、2020年 (担当: 「托鉢修道会の誕生と拡大—都市社会のキリスト教信仰」、83-89頁)  
: 鈴木董編『狭の歴史: 西洋編上+中東編』、清水書院、2020年 (担当: 「アッシジの聖フランチェスコ—一人のカリスマとその『記憶』の物語」、202-217頁)  
: 高山博・亀長洋子編『中世ヨーロッパの政治的結合体』、東京大学出版会、2022年2月 (担当: 「中世ドミニコ会統治における総会と総長—大学学位の問題を通じて—」、383-402頁)  
駒田亜紀子 (監修・分担執筆) : 『文字と絵の小宇宙 国立西洋美術館 内藤コレクション 写本リーフ作品選』 (印刷中)  
原 基晶 (単著) : 『ダンテ論—『神曲』と「個人」の出現』、青土社、2021年  
白川 太郎 (分担執筆) : 甚野尚志編『疫病・終末・再生: 中近世キリスト教世界に学ぶ』、知泉書館、2021年 (担当: 「預言者に従う人々: 13-14世紀転換期エミリア地方における終末待望とアポストリの変容」、71-95頁)  
(共訳) : ウィンストン・ブラック／大貫俊夫監訳『中世ヨーロッパ ファクトとフィクション』、平凡社、2021年 (担当: 「ヨハンナという名の女教皇がいた」、241-265頁)

## ●研究発表・講演

荒木 文果 : 「イタリア美術への招待—ミケランジェロとティツィアーノ: 素描と色彩」、福岡日伊協会主催美術セミナー、オンライン、2021年8月10日  
: 「イタリア美術への招待—ラファエロの優美: バラティーナ宮殿所蔵『椅子の聖母』」、福岡日伊協会主催美術セミナー、オンライン、2021年9月9日  
: 「イタリア美術への招待—レオナルド・ダ・ヴィンチの技法: 『最後の晩餐』の修復事業」、福岡日伊協会主催美術セミナー、オンライン、2021年10月8日  
: 「15世紀末にローマで制作された壁画にみられる競合意識」 Hiyoshi Research Portfolio 2021 (ポスター発表)、慶應義塾大学日吉キャンパス／オンライン、2021年11月6日 <http://hrp.hc.keio.ac.jp/research/2531.html>  
: 「ローマ、サント・スピリト病院『シクストゥス4世の生涯』壁画の特異性と二大托鉢修道会に関わる美術作品との関係について」、ReMo研A02班研究会、オンライン、2021年12月7日  
: 「巨大な装飾写本: ローマ、サント・スピリト・イン・サッシア病院『教皇シクストゥス4世の生涯』の壁画におけるフランシスコ修道会美術の影響について」、ReMo研シンポジウム2021「東西中世における修道院・寺社の書物文化—制作・教育・世界観の変容」、東京都立大学／オンライン、2021年12月19日  
: 「イギリス美術」の誕生、福岡日英協会主催イギリス美術セミナー、オンライン、2022年3月11日  
赤江 雄一 : 「托鉢修道会の司牧革命におけるメディアの総合的研究— ReMo研「中近世における宗教運動とメディア・世界認識・社会統合キックオフミーティング」、2020年度ReMo研第1回全体会議、オンライン、2021年3月16日  
: 「問題ある説教者としての教皇ヨハネス22世—至福直観論争の別側面—」、三田史学会2021年度大会、オンライン、2021年6月26日  
梶原 洋一 : 「大学学位をめぐる中世ドミニコ会のジレンマ」、関西中世史研究会、オンライン、2021年3月28日  
: 「托鉢修道会のアイデンティティと書物」、Remo研シンポジウム2021「東西中世における修道院・寺社の書物文化—制作・教育・世界観の変容」、東京都立大学／オンライン、2021年12月18日  
原 基晶 : 「新著『ダンテ論—『神曲』と個人の出現』をめぐる」、ReMo研講演会シリーズ2021第2回、オンライン、2021年11月29日  
白川 太郎 : 「グリエルマとマイフレダ: 13世紀末ミラノにおける信仰・聖人・異端」、ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所研究会、オンライン、2020年5月2日  
: 「信仰改革と福音的イタリア: ヴァルド派牧師エミリオ・コンバのリソルジメント」、多元文化学会 2020年度秋季大会、オンライン、2020年11月14日  
: 「後期中世イタリアの神秘体験者崇敬と信仰文化」、早稲田大学文学研究科博士論文構想発表会、オンライン、2020年11月28日  
: “Nemo propheta in patria: Chiara da Montefalco tra venerazione e critiche,” Incontro: Storia della chiesa e delle eresie medievali, Università degli Studi di Firenze, 2021年5月6日  
: 「後期中世スポレート渓谷における神秘体験者: キアラ・ダ・モンテファルコをめぐる崇敬と対立」、第71回日本西洋史学会、武蔵大学 (オンライン開催)、2021年5月16日  
: 「「心臓の奇跡」を超えて: 預言者キアラ・ダ・モンテファルコと後期中世イタリアの信仰文化」、イタリア史研究会 2021年度7月例会、オンライン、2021年7月4日  
: 「宗派史から国民史へ? 19世紀ヴァルド派の歴史叙述とそのイタリア化」、第1回早稲田大学ナショナリズム・エスニシティ研究所若手研究者研究発表会、2021年9月18日  
: 「19世紀ヴァルド派の「イタリア化」と歴史叙述: 牧師エミリオ・コンバと福音的イタリアの系譜論」、歴史論研究会第9回関東部会例会、オンライン、2021年9月23日  
: 「預言者の到来: 14世紀初頭エミリア地方のアポストリ・ネットワーク」、2021年度早稲田大学史学会、オンライン、2021年10月2日  
: 「自由主義期ヴァルド派の国民史と信仰改革論: 牧師エミリオ・コンバと福音的イタリアの系譜論」、イタリア近現代史研究会例会、オンライン、2021年10月23日  
: 「14世紀初頭コルトーナにおける守護聖人崇敬の形成: 聖マルゲリタの『事績録』における都市と托鉢修道会」、ReMo研シンポジウム2021「東西中世における修道院・寺社の書物文化—制作・教育・世界観の変容」、東京都立大学／オンライン、2021年12月19日

## ●短報・書評・アウトリーチ

荒木 文果 (単著・書評) : Book review of Filippino Lippi: Beauty, Invention and Intelligence, ed. Paula Nuttall et al., *Renaissance Quarterly* 75(3), in press.  
(講師) : 「美術史を学ぶ、アカデミック・スキルズ10分間講義ビデオ (慶應義塾大学教養研究センター、Youtube公開)  
: 「西洋絵画の旅 I: ルネサンス」、ビジネスマン向け芸術文化に関する基礎講座、大分県立美術館、2021年10月29日  
: 「西洋絵画の旅 II: 新古典主義」、ビジネスマン向け芸術文化に関する基礎講座、大分県立美術館、2021年11月26日  
: 「西洋絵画の旅 III: 印象派」、ビジネスマン向け芸術文化に関する基礎講座、大分県立美術館、2021年12月17日  
梶原 洋一 (単著) : 「2020年の歴史学界—回顧と展望: ヨーロッパ中世—西欧・南欧」、『史学雑誌』130:5 (2021)、316-321頁  
: 「研究経過報告『中世の托鉢修道会における大学学位の意義』」、『京都産業大学総合学術研究所 所報』16 (2021)、139-145頁  
(編集協力) : 角川まんが学習シリーズ『世界の歴史』(KADOKAWA、2021年刊)、プロット執筆・監修 (担当: 第6巻4章、第7巻2章、第8巻2章、第9巻1章)  
: Podcast「コテンラジオ」コンテンツ制作協力 (2021年)  
駒田亜紀子 (企画展監修) : 『内藤コレクション展II 中世からルネサンスの写本 祈りと絵』(国立西洋美術館新館版画素描室、2020年6月18日～8月23日、開催期間短縮)  
: 『内藤コレクション展III 写本彩飾の精華 天に捧ぐ歌、神の理』(国立西洋美術館新館版画素描室、2020年9月8日～10月18日、開催期間短縮)  
白川 太郎 (単著・報告要旨) : 「グリエルマとマイフレダ: 13世紀末ミラノにおける信仰・聖人・異端」、『エクス・フランス』11 (2020)、163-163頁  
(単著・書評) : 「イタリア中世宗教史研究における「女性の信仰生活」(書評 Vita religiosa al femminile (secoli XIII-XIV), Roma: Viella, 2019)」、『立教史学』5 (2022)、掲載予定



## 2020～2021年度業績一覧

白川 太郎(単著・書評):『異端審問の中世: Benedetti, Marina, Medioevo inquisitoriale. Manoscritti, protagonisti, paradossi, Roma: Salerno Editrice, 2021』、  
『エクスプレス』12 (2022)、59-73頁

### A03 イエズス会班

#### ●論文

浅野ひとみ(単著):『キリシタン遺物に見るイスパニア世界』、『美術フォーラム21』43 (2021)、46-52頁

石川 博樹(単著):『16～18世紀のエチオピア北部におけるテフの消費拡大とインジェラの成立』、『農耕の技術と文化』30 (2021)、1-35頁  
:『ローマ・カトリックの地獄・煉獄の受容をめぐる2つのイエズス会布教の比較: 武田和久氏の報告へのコメント』、『メトロポリタン史学』17 (2021)、  
127-130頁

小俣ラボー日登美(単著):『イエズス会の公的殉教観を『イエズス会の百年像』(1640) からひもとく——日本の代表的な殉教者としてのカルロ・スピノラ像』、  
『キリシタン文化研究会会報』155 (2020)、1-44頁  
:『絵はことばを裏切る——ニコラ・トリゴー『日本殉教史』(1623/1624) の挿絵とテキスト』、『京都市立芸術大学美術学部紀要』65 (2021年)、  
49-67頁  
:『「偶像崇拜」の地・日本——近世フランスの思想家ルイ・リショームの言説から』、『佛教大学歴史学部論集』11 (2021)、45-65頁  
:『17-18世紀日欧間の聖遺物の旅』、『メトロポリタン史学』第17号、2021年12月、5-38頁

折井 善果(単著):『フランス国会図書館蔵『サントスの御作業』(1591年) について』、『キリシタン文化研究会会報』157、15-22頁、2021年  
:『近世初期ヨーロッパのインテレクチュアル・ヒストリーからみた平山常陳事件—L・フロレス、P・デ・スニガの司祭身分隠匿問題をめぐって—』、  
大橋幸泰編『2017～2020年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(一般)17H02392「近世日本のキリシタンと異文化交流」中間成果報告集』、  
2021年、91-101頁

武田 和久(単著):『キリスト的地獄観の流用(アプロプリエーション)とアメリカ先住民—17-18世紀スペイン領南米ラプラタ地域のイエズス会布教区を中心に—』、  
『メトロポリタン史学』17 (2021)、87-103頁

武田 和久(Guillermo Wildeと共著):『Tecnologías de la memoria: mapas y padrones en la configuración del territorio guaraní de las misiones』, *Hispanic American Historical Review* 101:4 (2021), pp. 597-627.

平岡 隆二(単著):『キリシタンと和時計関連史料』、大橋幸泰編『2017～2020年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(一般)17H02392「近世日本のキリシタンと異文化交流」中間成果報告集』、2021年、62-73頁

アンドレス・メナチェ(単著):『聖フランシスコ・デ・ザビエル書簡における僧侶像: 好意的な印象から好戦的な態度へ』、『アジア・キリスト教・多元性』18 (2020)、13-27頁  
(単著・修士学位論文):『17世紀の排耶書におけるキリシタン排除と「内部性」の問題—雪窓宗崔『対治邪執論』を中心に—』(京都大学大学院文学研究科)、2022年1月

#### ●書籍

小俣ラボー日登美(単著):『*Des Indes lointaines aux scènes des collèges: Les reflets des martyrs de la mission japonaise en Europe (XVIe – XVIIIe siècle)*』, Münster: Aschendorff, 2020.

(分担執筆): Fernando Quiles et al. (eds.), *A la luz de Roma: Santos y santidad en el barroco iberoamericano. Volumen III. Tierra de santidad*, Roma: Roma Tre Press, 2020 (担当: “Death on the Cross: the Beatification of the Twenty-Six Martyrs of Nagasaki (1627) and the Iconography of the Crucifixion,” pp. 129-150).  
: Oba Haruka et al. (eds.), *Japan on the Jesuit Stage: Transmissions, Receptions, and Regional Contexts*, Leiden: Brill, 2021 (担当: “Japanese Martyrs in French Jesuit Drama (Late Seventeenth-Early Eighteenth Century): Between Violence and Bienséance,” pp. 87-131).  
: Cindy Yik-yi Chu et al. (eds.), *The Palgrave Handbook of the Catholic Church in East Asia, Vol. 3: Japan*, London: Palgrave MacMillan, 2022 (担当: “Persecutions and Martyrdom in Japan”).

浅野ひとみ(共編著):『覚醒する禁教期キリシタン文化』、長崎純心大学、2022年3月刊行予定

石川 博樹(共編著):『論点・東洋史学: アジア・アフリカへの問い158』、ミネルヴァ書房、2022年(担当:「無文字社会の歴史: サハラ以南アフリカの歴史研究は可能か」、28-29頁)

折井 善果(共編著): Yoshimi Orii y María Jesús Zamora Calvo (eds.), *Cruces y Áncoras: La Influencia de Japón y España en un Siglo de Oro Global*, Madrid: Abada Editores, 2020.

(分担執筆): H. Madar (ed.), *Prints as Agents of Global Exchange, 1500-1800*, Amsterdam: Amsterdam University Press, 2021 (担当: “The Catholic Reformation and Japanese Hidden Christians: Books as Historical Ties,” pp. 159-180).  
: 白井純・岸本恵実編『キリシタン語学入門』、教文館、2022年

バトリック・シュウェマー(共著): エリザ・タシロ/白井純編『リオ・デ・ジャネイロ国立図書館蔵 日葡辞書』、八木書店、2020年(担当: 英訳と監訳)  
: 高祖敏明、五野井隆史編『潜伏キリシタン図譜 Hidden Kirishitan of Japan Illustrated』、鎌倉春秋、2020年(担当: 英訳と監訳)

武田 和久(共編著): Laura Dierksmeier, Fabian Fechner and Kazuhisa Takeda (eds.), *Indigenous Knowledge as a Resource: Transmission, Reception, and Interaction of Global and Local Knowledge between Europe and the Americas, 1492-1800*, Tübingen: Tübingen University Press, 2021  
(担当: “Indigenous Knowledge of Land Use and Storage Practices of Historical Documents in the Jesuit-Guaraní Missions of Colonial South America: A Comparative Analysis of Maps and Census Records,” pp. 147-165)  
(<https://publikationen.uni-tuebingen.de/xmlui/handle/10900/117746>).

(分担執筆): Stefano U. Baldassarri (ed.), *Guerre di religione e propaganda 1350-1650*, Roma: Tab Edizioni, 2020 (担当: “Fighting Confraternities, Saints and Angels: A Study of the Christian Military Culture in the Medieval-Early Modern Iberian World,” pp. 186-216).  
: Fernanda Alfieri and Takashi Jinno (eds.), *Christianity and Violence in the Middle Ages and Early Modern Period: Perspectives from Europe and Japan*, Berlin and Boston: De Gruyter, 2021 (担当: “The Global Expansion of Christian Violence in the Old and the New World: From Early Church Fathers to the Jesuits,” pp. 143-158).

: 甚野尚志編『疫病・終末・再生: 中近世キリスト教世界に学ぶ—』、知泉書館、2021年(担当:「罹患先住民女性の臨死体験と対称性—スペイン領南米ラプラタ地域のイエズス会布教区を事例として—」、315-335頁)

平岡 隆二(分担執筆): 日本思想史事典編纂委員会『日本思想史事典』、丸善出版、2020年(担当:「蘭学(洋学)」)

: 日本科学史学会編『科学史事典』、丸善出版、2021年(担当:「江戸の天文暦学: 西洋天文学知の多様な自己化」、318-321頁)

: 洋学史学会監修・青木歳幸ほか編『洋学史研究事典』、思文閣出版、2021年(担当:「沢野忠庵」「ビュルゲル」「西学書」「坤輿万国全図」「長崎遊学」)



- 平岡 隆二 (分担執筆) : Bill M. Mak and Eric Huntington (eds.), *Overlapping Cosmologies in Asia: Transcultural and Interdisciplinary Approaches*, Brill, 2022 (担当 : Chapter 4 “Deciphering Aristotle with Chinese Medical Cosmology: Nanban Unkiron and the Reception of Jesuit Cosmology in Early Modern Japan,” pp. 98–115).  
: 平井松午・島津美子編『〈稿本・大名家本〉伊能図研究図録』、創元社、2022年 (担当 : 「長崎歴史文化博物館収蔵『伊能図』」、267–273頁)  
: 岸本恵美・白井純編『キリシタン語学入門』、八木書店、2022年 (担当 : 「東西コスモロジーの出会いとキリシタン文献」、39–40頁)

## ● 研究発表・講演

- 浅野ひとみ : 「ザビエルのもたらした信仰具」、ReMo研A03班月例研究会、2021年6月24日  
: 「キリシタン信仰具とイスパニア世界」、スペインラテンアメリカ美術史研究会シンポジウム「イスパニア世界と日本」、2021年7月31日  
: “Sobre los restos del Galeón San Diego naufragado en 1600,” Simposio Internacional (Universidad Iberoamericana) Japón y el mundo hispánico a través de la ruta transpacífica: siglos XVI y XVII, 2021年10月5日
- 石川 博樹 : 「経済活動から見た北部エチオピアの2王国の比較研究」、日本アフリカ学会第57回学術大会、オンライン、2020年5月23、24日  
: 「エチオピアのオロモの移動：その歴史的意義と研究の困難さ」、国立民族学博物館共同研究課題「人類史における移動概念の再構築：「自由」と「不自由」の相克に注目して」、2020年度第1回研究会、国立民族学博物館／オンライン、2020年11月28日  
: 「FAOSTATに基づくアフリカにおけるジャガイモ栽培の変遷（1961～2018年）」、科研費基盤研究（B）「アフリカ食文化研究の新展開：食料主権論のために」2020年度第2回研究会、オンライン、2020年8月27日  
: 「16～18世紀エチオピア北部におけるテフの重要性の変化について」、日本ナイル・エチオピア学会第30回学術大会、オンライン、2021年4月18日  
: 「エチオピア関連ポルトガル語史料における作物名称MilhoとGrãoに関する考察」、日本アフリカ学会第58回学術大会、オンライン、2021年5月23日  
: 「エチオピア北部におけるインジェラの成立に関する歴史学研究」（ポスター発表）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所海外学術調査フォーラム、2021年6月20日  
: 「武田和久氏の報告に対するコメント」、メトロポリタン史学会第17回大会、東京都立大学（オンライン開催）、2021年9月25日  
: 「イタリアにおけるエチオピア人種・民族論の展開」、日本オリエント学会第63回大会、オンライン、2021年10月31日
- 岡田 正彦 : 「イエズス会エチオピア布教の概要と近年の研究状況」、ReMo研A03班月例研究会、2021年6月24日、オンライン、2021年11月11日  
: 「仏暦の忌日と日本仏教」、日本宗教学会・第80回学術大会・パネル「暦の思想史」、2021年9月7日  
: 「19世紀の日本における仏教天文学と仏教科学」、ReMo研A03班月例研究会、2022年1月13日
- 小俣ラポー日登美 : 「バチカンと日本をつなぐ橋——長崎二十六聖人の列福 日本の殉教者は、どうしてヨーロッパの聖人になったのか?」、角川財団・朝日新聞スペシャルバチカンプロジェクト 特別シンポジウム、角川本社ビル2Fホール（オンライン参加）、2020年11月7日  
: 「殉教」という焦点：17世紀の列福制度黎明期における日本殉教者の認定をめぐる、日本西洋史学会第70回大会、大阪大学（オンライン開催）、2020年12月12日  
: “Des Indes lointaines aux scènes des collèges : les reflets des martyrs de la mission japonaise en Europe Aschendorff, 2020,” Séminaire d’histoire des missions d’évangélisation, オンライン、2021年3月12日  
: 「聖なる肌色と身体的他者性の受容—「日本人」は近世ヨーロッパのキリスト教徒にどのように描かれたのか—」、日本西洋史学会第71回大会小シンポジウム主催者・発表「信仰の世界地図—長崎26聖人信仰の視覚化とその伝播をめぐる」、武蔵大学（オンライン開催）、2021年5月12日  
: 「殉教をみるということ—近世ヨーロッパにおける日本からの聖遺物—」、メトロポリタン史学会第17回大会シンポジウム「前近代世界における宗教運動と文化交流の諸相」、東京都立大学（オンライン開催）、2021年9月25日  
: 「16–18世紀西欧における殉教観の形成」、国際日本文化研究センター共同研究会「西洋における日本観の形成と展開」、国際日本文化研究センター共同研究会（オンライン開催）、2021年10月23日  
: 「長崎二十六殉教者の列福（1627）と列聖（1862）」、角川文化振興財団『バチカンに眠る日本の記憶—文化と交流450年・教皇の知り得た日本—』、上智大学（オンライン開催）、2021年11月13日  
: 「16–17世紀に日本で起こった殉教—その言説の西欧における形成—」、批判的人種・エスニシティ研究会、京都大学人文科学研究所（オンライン開催）、2021年11月21日  
: 「16–18世紀西欧における殉教観の形成—西洋史的文脈の中の記号としての日本—」、人文科学研究所着任研究発表会、京都大学人文科学研究所（オンライン開催）、2021年11月25日  
: 「偶像・偶像崇拝・暴君の共演—イエズス会と日本の宗教—」、ReMo研講演会シリーズ2021「中近世宗教史研究の最前線」、オンライン、2021年12月5日  
: 「近世から近代の西欧における日本殉教観の変転」、国際日本文化研究センター共同研究会「西洋における日本観の形成と展開」、オンライン、2022年2月26日  
: “De l’idée de la fille parfaite: Les martyrs féminins dans les récits de la mission japonaise (XVIIe–XVIIIe siècles),” Jesuits as promoters of women’s holiness from the 16th to the 19th century, Université Saint-Louis, Bruxelles, オンライン、2022年3月4日  
: 「普遍と特殊のはざまを垣間見る—書評『宣教と適応：グローバル・ミッションの近世』によせて—」、国立民族学博物館共同研究「近世カトリックの世界宣教と文化順応」、オンライン、2022年3月20日
- 折井 善果 : “Pietro Alagona’s “Compendium Manualis Navarri” published by the Jesuit Mission Press in Early Modern Japan (1597),” Max Planck Institute for Legal History and Legal Theory, “Legal Books and Beyond in the Iberian Worlds: Normative Knowledge Production in the Age of Printing Press,” オンライン、2022年1月20日
- バトリック・シュウェマー : 「反キリシタン物語成立考 否定という受容」、大航海時代のキリシタン文学：グローバル社会の形成に果たした日本の役割、愛知県立大学日本文化学部、2020年10月14日  
: 「A Transgender Saint in Translation: Marina the Monk in the Secret Books of the Hidden Christians」、「南蛮人」を超えて：オンライン国際シンポジウム、2021年2月18日  
: 「キリシタン聖人伝成立考」、キリシタン語学研究会、2021年3月3日  
: 「キリシタン資料の裏を読む」、ReMo研シンポジウム2021「東西中世における修道院・寺社の書物文化——制作・教育・世界観の変容」、東京都立大学／オンライン、2021年12月19日  
: 「キリシタン聖人伝の日欧の原典」、キリシタン文化研究会、上智大学、2021年12月5日  
: “The Medieval Japanese Life of St. Alexius of Edessa,” 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies, Whova, オンライン、2021年8月27日
- 武田 和久 : “Militant Confraternities in the Iberian World: Another Face of Religious Organization,” オンライン、2020年4月19日  
: 「罹患先住民女性の臨死体験と対称性—スペイン領南米ラプラタ地域のイエズス会布教区を事例として—」、早稲田大学ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所、オンライン、2020年12月6日  
: 「イエズス会班キックオフミーティング」、ReMo研A03班2020年度第1回研究会、オンライン、2020年12月20日  
: 「イエズス会の近代性に関する批判的考察のための総合的歴史学研究— ReMo研「中近世における宗教運動とメディア・世界認識・社会統合キックオフミーティング」、ReMo研2020年度第1回全体会議、オンライン、2021年3月16日



# 2020～2021年度業績一覧

- 武田 和久：“Las relaciones de parentesco y cacicazgo guaraní en las misiones jesuitas de Paraguay: el producto híbrido de la colonización y evangelización española,” XIX Congreso de AHILA (Asociación de Historiadores Latinoamericanistas Europeos): Consideraciones para la investigación de la circulación del conocimiento local: las interacciones entre Europa y las Américas en la temprana modernidad (simposio No. 4), オンライン, 2021年8月23日 (<https://www.hsozkult.de/conferencereport/id/tagungsberichte-9097?language=en>).
- ：「キリスト教的地獄観の流行（アプロプリエーション）とアメリカ先住民-17-18世紀スペイン領南米ラプラタ地域のイエズス会布教区を中心に」、メトロポリタン史学会第17回大会シンポジウム「前近代世界における宗教運動と文化交流の諸相」、東京都立大学（オンライン開催）、2021年9月25日
- ：「イエズス会服従と現地改宗エリート（知識人）の誕生」、ReMo研A03班月例研究会、オンライン、2021年5月27日
- 平岡 隆二：“A Public Cosmology Lecture with a Clockwork Astronomical Model in 18th Century Japan,” 26th International Conference of History of Science and Technology (ICHST 2021), Prague, オンライン、2021年7月28日
- ：「イエズス会科学と近世仏教：初中期仏僧の西洋地球説への反応を中心に」、ReMo研合同研究会「科学、医療、宗教の相互連関—中近世のキリスト教と仏教を中心に」、オンライン、2021年9月15日
- ：「開陽丸引き上げ文書と梅文鼎『曆算全書』」、洋学史学会オンラインシンポジウム「開陽丸引き揚げ文書について 幕府天文方と開陽丸」、オンライン、2021年11月14日
- ：“Buddhist Reaction to the Western Theory of Round Earth in 17th and 18th Century Japan,” The 6th History of Mathematical Sciences: Portugal and East Asia VI: Measuring Time, Heaven and Earth, Seoul, オンライン、2021年12月9日
- アンドレス・メナチェ：「宣教師たちと「悪魔の法」—イエズス会士による伴天連追放令の理解—」、アジア・キリスト教・多元性研究会、2021年4月
- ：「ザビエルから雪窓へ」、ReMo研A03班月例研究会、オンライン、2021年9月3日

## ●短報・書評・アウトリーチ

- 浅野ひとみ（単著・書評）：「五野井隆史監修『潜伏キリシタン図譜』、『日本の神学』60（2021）190-195頁
- （写真鑑定）：「長崎市野母崎個人蔵マリア観音所見」2021年9月
- ：「東京都個人蔵磔刑像所見」2021年10月
- ：「長崎市出土遺物所見」2021年12月
- ：「延岡城址出土メダル1点鑑定所見」2022年2月
- 石川 博樹（単著・書評）：「池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史：美の起源にせまる』、『アフリカ研究』99（2021）、57-60頁
- （単著・新刊紹介）：「郡勇造訳注『ケブラ・ナガスト：聖櫃の将来とエチオピアの栄光（東洋文庫904）』、『オリエント』64:2（2022）、印刷中
- （取材）：「アフリカの食と農の歴史 アフリカ史研究から世界を考える 石川博樹先生 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 現代アフリカ地域研究センター」(<https://www.sekaiwokaeyo.com/ni211/>)、みらいぶっく学問・大学なび「こんな研究をして世界を変えよう～大学の研究室を訪問してみた」(2021年12月17日公開)
- （受賞）：日本ナイル・エチオピア学会第30回学術大会最優秀発表賞、2021年4月18日
- Takeda, Kazuhisa（単著・書評）：“Pedro Miguel Omar Svriz Wucherer, Resistencia y negociación: milicias guaraníes, jesuitas y cambios socioeconómicos en la frontera del imperio global hispánico (ss. XVII-XVIII), Rosario: Prohistoria, 2019. 348 pp.,” *Revista Complutense de Historia de América*, 46 (2020), pp. 270-271.
- 平岡 隆二（単著）：「今井泰さんと『天官書』、『人文』67（2020）、55-57頁
- アンドレス・メナチェ（翻訳：日→西）：Yoshimi Orii y María Jesús Zamora Calvo (eds.), *Cruces y áncoras: la influencia de Japón y España en un Siglo de Oro global*, Madrid: Abada Editores, 2020（担当：Igawa Kenji, “La ‘obediencia’ de la primera embajada de Japón en Europa,” pp. 13-38）.

## B01 日本中世寺社班

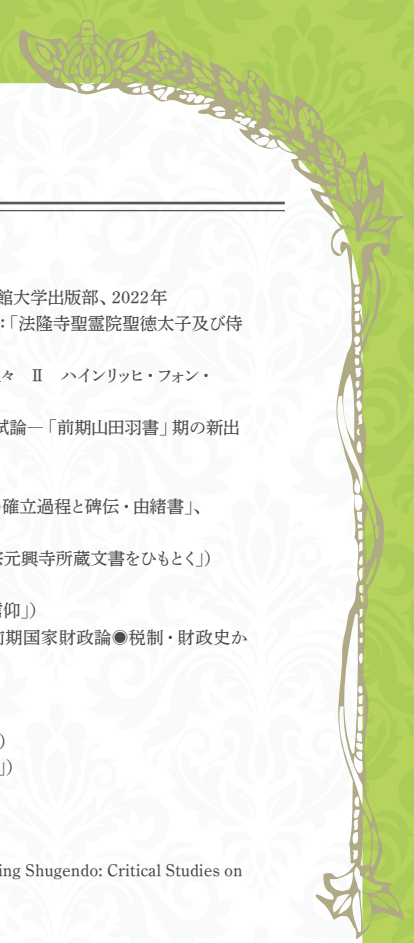
### ●論文

- 刈米 一志（単著）：「備前頼宮氏についての基礎的考察」、『吉備地方文化研究』31（2021）、1-44頁
- 鎌倉 佐保（共著）：「紀伊国阿豆川荘とその史料（後篇）—建治相論の再検討—」、『人文学報』517-9（2021）、1-32頁
- ：「紀伊国阿豆河荘とその史料（続篇）—高野山金剛峯寺の旧領回復訴訟をめぐる—」、『人文学報』518-9（2022）、印刷中
- 小林 郁（単著）：「神宮御師に関する新出資料群の基礎的研究」、『神道宗教』261（2021）、139-141頁
- ：「伊藤聡著『神道の中世—伊勢神宮・吉田神道・中世日本紀—』、『史学雑誌』130:3（2021）、100-101頁
- 佐々木守俊（単著）：「月輪の像内納入について」、『仏教芸術』6（2021）、59-76頁
- 服部 光真（単著）：「古代の山寺を語る史料—古代の壺坂寺と『南法華寺古老伝』」、『季刊考古学』156（2021）、90-93頁
- ：「近世前期の都市寺院における惣寺と寺僧—南都十輪院と瓦竈法寿庵—」、『元興寺文化財研究所研究報告2021』元興寺文化財研究所、2021年
- 藤本 誠（単著）：「『東大寺諷語文稿』の再検討—病者（障害者）・路辺遺棄者・貧窮者等を中心として—」、『日本仏教総合研究』18（2020）、15-40頁
- 守田 逸人（単著）：「香川大学図書館神原文庫と所蔵史料について」、『古文書研究』90（2020）、106-115頁
- 湯浅 治久（単著）：「戦国史研究における地域社会の描き方」、『歴史評論』852（2021）、31-39頁
- ：「日本中世における贈与社会論をめぐる」、『歴史評論』861（2021）、59-73頁

### ●書籍

- 上野 進（分担執筆）：坂出市史編さん所『坂出市史 通史 上 中世篇』、坂出市、2020年（担当：31-35、196-205頁）
- ：香川県教育委員会編『香川の文化財』、香川県教育委員会、2021年（担当：64-65、151、158-159、161、183、185、193-194、196、199、202頁）
- ：「志度寺の歴史」、『四国八十八ヶ所霊場第八十六番札所 志度寺調査報告書 第2分冊』、香川県・香川県教育委員会、2022年3月
- （共編著）：香川大学教育学部監修、守田逸人・平篤志・寺尾徹編『大学的香川ガイド』、昭和堂、2022年3月
- 刈米 一志（共編著）：就実大学吉備地方文化研究所編『吉備地方中世古文書集成（三） 備前本蓮寺文書』、2021年（担当：全編の編集と解説）
- （分担執筆）：橋本道範編『自然・生業・自然観—琵琶湖の地域環境史—』、小き子社、2022年（担当：琵琶湖・淀川水系における中世漁撈について）
- 川崎 剛志（単著）：「修験の縁起の研究—正当な起源と歴史の創出と受容—」、和泉書院、2021年
- （分担執筆）：伊藤聡・吉田一彦編『日本宗教史3 宗教の融合と分離・衝突』、吉川弘文館、2020年（担当：「修験道の成立—仏法としての正統性を支える論理・言説・書物—」、100-124頁）
- ：Andrea Castiglioni, Fabio Rambelli, and Carina Roth (eds.), *Defining Shugendo: Critical Studies on Japanese Mountain Religion*, Bloomsbury Academic, 2020（担当：「En no Gyoja's Legitimization in the Context of Japanese Esoteric Buddhism.」pp. 137-144）
- ：Fabio Rambelli and Or Porath (eds.), *Rituals of Initiation and Consecration in Premodern Japan: Power and Legitimacy in Kingship, Religion, and the Arts*, De Gruyter, 2022（担当：「Before the Appearance of Shugen Kanjō: Origin and History of a Forged Ritual.」pp. 377-390）
- 小林 郁（共著）：展示図録『伊勢参宮の先導者たち—隆盛・廃止—その後—』、皇學館大学佐川記念神道博物館、2021年





- 小林 郁（共著）：皇學館大学研究開発推進センター史料編纂所編 資料叢書第9輯『神宮御師資料 山本大夫関係文書』、皇學館大学出版部、2022年
- 佐々木守俊（分担執筆）：板倉聖哲・高岸輝編『日本美術のつくられ方—佐藤康宏先生の退職によせて』、羽鳥書店、2020年（担当：「法隆寺聖霊院聖徳太子及び侍者坐像と像内納入品」）
- ：日高薫／ベッティーナ・ツォルン責任編集、人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館編『異文化を伝えた人々 II ハイナリッヒ・フォン・シーボルトの蒐集資料』、臨川書店、2021年（担当：「ウィーン世界博物館の阿弥陀三尊像について」）
- 千枝 大志（分担執筆）：加藤慶一郎編『日本近世社会の展開と民間紙幣』、塙書房、2021年（担当：「山田羽書の券面に関する一試論—「前期山田羽書」期の新出史料の検討を中心に—」）
- 服部 光真（共著）：元興寺・元興寺文化財研究所編『図説元興寺の歴史と文化財』、吉川弘文館、2020年
- （分担執筆）：愛媛県歴史文化博物館編『明石寺と四国遍路』、愛媛県歴史文化博物館、2021年（担当：「近世明石寺の確立過程と碑伝・由緒書」、145-151頁）
- ：元興寺・元興寺文化財研究所編『日本仏教はじまりの寺 元興寺』、吉川弘文館、2020年（担当：「華嚴宗元興寺所蔵文書をひもとく」）
- 藤本 誠（分担執筆）：佐々木虔一・川尻秋生・黒済和彦編『馬と古代社会』、八木書店、2021年（担当：「祭祀・祓と馬」）
- ：伊藤聡・佐藤文子編『日本宗教の信仰世界』、吉川弘文館、2020年（担当：「古代の説法・法会と人々の信仰」）
- 守田 逸人（分担執筆）：秋山哲雄・田中大喜・野口華世編『増補改訂新版 日本中世史入門』、勉誠出版、2021年（担当：「中世前期国家財政論●税制・財政史から中世国家・社会の成立を考えるために」、105-143頁）
- （共編著）：香川大学教育学部監修、守田逸人・平篤志・寺尾徹編『大学的香川ガイド』、昭和堂、2022年
- 湯浅 治久（単著）：『中世の富と権力：寄進する人びと』、吉川弘文館、2020年
- （分担執筆）：田中大喜編『中世武家領土の世界』、勉誠出版、2020年（担当：「中世武士団における一族・被官の西遷」）
- ：菊地大樹・近藤祐介編『寺社と社会の接点』、高志書院、2021年（担当：「中世東国社会論再構築の試み」）

## ●研究発表・講演

- 刈米 一志：『『太平記』にみる岡山の中世武士団』、岡山市立御津公民館、2021年12月4日
- Kawasaki, Tsuyoshi : Andrea Castiglioni, Fabio Rambelli, Carina Roth, Kawasaki Tsuyoshi, Max Moerman, and Caleb Carter, Defining Shugendo: Critical Studies on Japanese Mountain Religion, IMAP Lecture (九州大学)、2020年11月8日
- 川崎 剛志：「西大寺縁起絵巻断簡からみる信仰の一齣」、第1回正宗文庫文庫セミナー、オンライン、2021年9月20日
- ：「靈山の縁起から修験の縁起へ」、日本山岳修験学会特別例会、オンライン、2021年9月26日
- ：「靈山・神倉山と蓬萊山の縁起伝承景観」、熊野歴史文化シンポジウム「熊野新宮の聖地文化—山・川・海の景観を愛でる—」、丹鶴ホール（和歌山県新宮市）、2021年11月7日
- ：「聖地と日本仏教史の再創出—『金剛山縁起』の偽撰と受容—」、Remo研シンポジウム2021「東西中世における修道院・寺社の書物文化——制作・教育・世界観の変容」、東京都立大学／オンライン、2021年12月18日
- 鎌倉 佐保（講演）：「『多摩市市制施行50周年記念誌』」、多摩市、2021年12月
- ：「『開発領主』と荘園の形成—荘園をどう教えるか—」、学芸大学史学会大会、招待講演、2021年11月21日
- 小林 郁：オンライン展示「伊勢参宮の先導者たち—隆盛・廃止・その後—」、神道博物館教養講座オンデマンド配信「伊勢御師を語る—御師制度廃止150年を迎えて—」、皇學館大学公式ホームページ生涯学習・公開講座専用フォーム、2022年2月
- ：「中世・近世の伊勢参宮—御師制度廃止150年を迎えて—」、四日市市熟年大学〈専攻課程〉、四日市市三浜文化会館〈カルチュラル三浜〉2回視聴覚室、2021年12月
- ：「中世伊勢御師研究素材としての檀那帳について」、日本道教会第72回大会、オンライン、2021年11月
- ：「伊勢御師とは何だったのか—御師制度廃止150年を迎えて—」、みえミュージアムセミナー 2021、三重県生涯学習センター視聴覚室、2021年10月
- 千枝 大志：「16～17世紀伊勢神宮地域をめぐる金融と信用の実像」、貨幣史研究会、オンライン、2021年6月6日
- ：「最近の研究の方向性をめぐって—本科研の関連研究を中心に—」、ReMo研B01班報告会、オンライン、2021年11月19日
- ：「武家拠点と伊勢神宮関連事項をめぐって」、武家拠点科研・福井研究集会、越前における武家拠点の形成と変容— 16-17世紀を中心に、福井市地域交流プラザ、2021年11月28日
- ：「伊勢参詣曼荼羅に関する一考察」、中世史研究会2月例会、オンライン、2022年2月25日
- 藤本 誠：『『日本霊異記』の成立と東アジアの仏教』、仏教文学会2020年12月例会シンポジウム「東アジアの中の『日本霊異記』」、2020年12月20日
- 守田 逸人：「中世普通寺関係文書の伝来について」、中世史研究会例会報告、2021年7月30日
- ：「コメント—讃岐の中世文書について—」、第12回中世地下文書研究会、2022年1月29日
- 湯浅 治久：「戦国期の諏訪社造営と「先例」管理—地域権力と地下文書の接点—」、第11回中世地下文書研究会、2020年12月20日

## ●短報・書評・アウトリーチ

- 鎌倉 佐保（単著）：「前田英之氏報告「鎌倉期の荘園制と複合的荘庭」を聞いて」、2020年度日本史研究会大会報告批判（『日本史研究』704号、2021年4月）
- 刈米 一志（単著・書評）：「書評 岡野浩二著『中世地方寺院の交流と表象』」、『歴史評論』852（2021）、103-107頁
- ：「総論「変革期の社会と宗教」」、『歴史評論』863（2022）、5-14頁
- 川崎 剛志（単著）：「西大寺縁起絵巻断簡からみる信仰の一齣」、『国文研ニュース』60（2022）、8頁
- 小林 郁（展示担当）：御師制度廃止150年展「伊勢参宮の先導者たち—隆盛・廃止・その後—」、皇學館大学佐川記念神道博物館、2021年10月4日～11月30日
- ：パネル展示「伊勢参宮の先導者たち—隆盛・廃止・その後—」、みえミュージアムセミナー 2021、三重県生涯学習センター1階エントランス（三重県立図書館前）、2021年10月
- 佐々木守俊（単著・書評）：「（書評）山本勉著『塩船観音寺』」、『多摩のあゆみ』185（2022）、27頁
- 藤本 誠（単著）：「日本古代の「在路飢病者」と古代仏教の「救済」」、『歴史評論』854（2021）、85-87頁
- ：「古代の荏原郡の交通と宗教施設からみた三田二丁目屋跡遺跡」、トキオ文化財株式会社編『三田二丁目屋跡遺跡—慶應義塾大学三田キャンパス東別館建て替え工事に伴う埋蔵文化財調査報告書—』、慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室発行、2021年
- （講師）：「仏教説話からみえる古代社会—古代地域社会の寺院と酒をめぐって—」、2021年度 極東証券株式会社社寄附講座 慶應義塾大学文学部公開講座『めぐりあう文学部』、慶應義塾大学文学部、2022年
- 湯浅 治久（単著・書評）：「書評と紹介 榎原雅治「地図で考える中世」」、『日本歴史』885（2022）、93-95頁



## 研究事例——歴史的にメディアをとらえること

### 「書物を織る——オットー朝期彩飾写本に於ける装飾文様のシンボリズム——」

安藤 さやか

本研究プロジェクト「ReMo研」のロゴは、ライヒェナウ修道院で11世紀初頭に制作された豪華彩飾写本の装飾イニシアルを原案としている。オットー朝期の彩飾写本制作の中心地のひとつであったライヒェナウでは、鮮やかな鉛丹の輪郭線で縁取られ金銀の顔料で塗られた壮麗なイニシアルを備える書物が多数制作された。その一例のサクラメンタリウム写本(図1)では、メアンダー文による額縁の内部が紅色の十字と花の模様で充填され、その上に、絡み合う金銀の唐草模様で形作られた、ミサの叙唱 *vere dignum* の短縮形 VD の装飾文字が、鈍い輝きを放ちながら浮かび上がる。

このような装飾文様による写本画の地の充填は、ライヒェナウだけではなく、コルヴァイ、ヒルデスハイム、トリーア、エヒテルナハ等の、オットー朝期の主要な修道院のスクリプトリウムによる作例で散見される。着想源となったのは、主にビザンツ帝国から贈答品として齎され、聖遺物や高価な書物を包むのに用いられた絹織物である。更に、ペルシャの絹織物を模したかのような文様の上に金文字で書かれた、オットー2世とビザンツ帝国皇女テオファヌとの婚姻証書(ヴォルフエンブッテル、国立文書館、6 Urk. Nr. 11)は、ガンダースハイム修道院で保管された間、近隣のスクリプトリウムでの写本制作に影響を与えたと考えられている。

織物を模した写本装飾は、皇帝や教皇、司教の纏う衣服のメタファーとして理解される(WAGNER 2004)。更に、アル

クインらの神学的著作によれば、聖母マリアは機織りであり、紫色の織物はキリストの血と肉の象徴であるから、織物文様の写本画はキリストの受肉の寓意と見なすことができる(BÜCHELER 2019)。このような近年の研究成果を踏まえるならば、上述のサクラメンタリウムの装飾イニシアルには、皇帝や高位聖職者の権威を示すとともに、聖体拝領でキリストの血と肉を視覚的・象徴的に想起させる機能があったと解釈することが可能だろう。

東方からの輸入織物の文様を写本装飾に採用した例は、既にカロリング朝初期写本に見られる。イニシアルの装飾頁を装飾文様で充填する例は、7世紀後半以降のインスラーの彩飾写本に特徴的であるばかりでなく、カール禿頭王時代の豪華写本(図2)にも認められるが、そこでは文様は文字や図像の間の余白を充填する平面的なものであった。織物から着想を得た文様を写本の装飾頁の地に充て、更にその上に金銀を用いて文字や図像を図として描く、階層付けられた文様の利用が始まったのは、10世紀後半以降のオットー朝期の写本でのことなのである。写本画家がこの新たな造形感覚をいかにして培ったのかを知るためには、具体的にどのような織物を眼にしえたのかを修道院の財産目録等から検討するとともに、織物や刺繍布といった異なるメディアそのものの造形原理を理解することが必要となるだろう。



図1 《ペータースハウゼンのサクラメンタリウム》  
ライヒェナウ、980年頃  
ハイデルベルク、大学図書館、Cod. Sal. IX b, fol. 43r  
(出典: <https://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/sal9b>)



図2 《カール禿頭王のサクラメンタリウム》  
カール禿頭王宮廷派、870年頃  
パリ、国立図書館、Ms. lat. 1141, fol. 4r  
(出典: <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b53019391x#>)



## 研究事例——歴史的にメディアをとらえること

### 「アッシジ、サン・フランチェスコ修道院聖堂サクロ・コンヴェント図書館所蔵のフランス起源彩飾写本 (13-14世紀前半)」

駒田 亜紀子

アッシジのサン・フランチェスコ修道院聖堂サクロ・コンヴェント図書館(Biblioteca del Sacro Convento; 以下、BSCと略す)は、1228年頃に始まる修道院の建設と並行してその形を整えてきた。今日700点余の中世写本が現存し、伝来の過程で他の所蔵機関に散逸した写本も含め、歴代の蔵書目録と現存写本との照合が進められてきた。

BSCの中世写本の蔵書の特徴は、13世紀後半-14世紀初頭にパリで制作された写本が数多く含まれていることである。現在、アッシジをはじめとするイタリアのフランチェスコ会修道院に収蔵されているフランス起源の写本の多くは、フランスにおける托鉢修道会の躍進に多大な影響を及ぼした国王ルイ9世(在位1226-70)が遺贈したもの、パリにおける修道会の拠点コルドリエ修道院から請求されたもの、パリ大学に学び教鞭を執った会士たちが持ち帰ったもの等に由来すると考えられている。こうした由来を反映し、BSC所蔵の13世紀第3-4半期までのフランス起源の彩飾写本においては、複数巻構成の註解付き聖書や教父著作などが大半を占める。

BSCが所蔵する彩飾写本に関する本格的な研究は、R. グランナーによる13世紀パリ彩飾写本研究(1977)を嚆矢とし、1988-90年にはBSCの彩飾写本の総合目録が刊行された。これらの先行研究を踏まえ、報告者が課題とするのは、彩飾のより正確な様式分析と年代推定に基づき、BSCに伝わるパリ彩飾写本とパリ大学やコルドリエ修道院の蔵書との比較考察を行い、後者に反映されたパリ彩飾写本の動向と前者との関連を探ることである。パリ彩飾写本市場では、1260年代後半頃から、それまで圧倒的多数を占めていた小型の一卷本聖書や複数巻の註解付き聖書、教父著作などに加え、ローマ

法令集、ラテン語訳アリストテレス著作やその註解、仏語訳聖書や十字軍関連テキストなどの、新たなレパートリーが登場する。事実、BSCの蔵書にも、13世紀末-14世紀初頭の制作と思われるラテン語訳アリストテレス著作の彩飾写本が確認されている。

報告者は、現在、BSC所蔵の註解付き聖書の挿絵を手がけた彩飾画家の一人が、パリ大学が所蔵していたアリストテレス写本の挿絵やイニシアル装飾を制作したことを把握した上で、当該画家としばしば協働して上記の新興レパートリーの彩飾写本を手がけた画家や写字生と顧客のネットワークのありようについて、調査を進めている。こうした調査は、托鉢修道士が司牧活動の際に携行した小型の一卷本聖書など、図書館の蔵書からは漏れる可能性のあるメディアのありようをより正確に把握することにも、寄与するものと思われる。レパートリーの変容という転換期にあった13世紀後半のパリ彩飾写本を媒介とする物的・人的なネットワークの探求を通じ、托鉢修道会士の司牧活動のありように光を当てたい。

#### 基本参考文献およびサイト

- ・BRANNER (R.), Manuscript Painting in Paris during the Reign of Saint Louis. Berkeley, 1977.
- ・ASSIRELLI (M.), SESTI (E.), et al., La Biblioteca del Sacro Convento di Assisi: 1, I libri miniati di età romanica et gotica; 2, I libri miniati del XIII e del XIV secolo. Assisi, Casa Ed. Francescana, 1988-90.
- ・アッシジ、サクロ・コンヴェント図書館公式サイト:  
<http://www.biblioassisi.it/> (accessed 01 Mar. 2022)



『註解付き聖書』歴代誌・下、冒頭イニシアル《玉座のソロモン王》  
パリ、1270年頃

Assisi, Fondo Antico presso Biblioteca del Sacro Convento, ms. 3, fol. 231r  
(出典: [https://www.internetculturale.it/jmms/iccuviewer/iccu.jsp?id=oai%253Awww.internetculturale.sbn.it%252FTeca%253A20%253ANT0000%253APG0213\\_ms.3&mode=all&teca=MagTeca+-+ICCU](https://www.internetculturale.it/jmms/iccuviewer/iccu.jsp?id=oai%253Awww.internetculturale.sbn.it%252FTeca%253A20%253ANT0000%253APG0213_ms.3&mode=all&teca=MagTeca+-+ICCU))



## 研究事例——歴史的にメディアをとらえること

### 媒体 東西のメディアとしてのキリシタン版

折井 善果

イエズス会が室町後期から江戸初期に日本で行った、ヨーロッパ式活字印刷機を用いた出版活動—いわゆる「キリシタン版」の出版—は、イエズス会が日本宣教においてとった「メディア」戦略の一つであろう。

キリシタン版の印刷部数は1300部とも1500部ともいわれ、出版文化の黎明期であった当時の日本の常識を凌駕するものであった。多額の経費がかかるが、それ以外にキリスト教会を開拓する術はない、と当時の来日イエズス会士は述べている。

キリシタン版の研究は、近年国語学において飛躍的に発展している。一方で、それらが当時のヨーロッパ=カトリック教会の著作のグローバルな到達点である、という視点で考えると、その典拠、すなわちそれぞれの著作が当時のヨーロッパのいずれの出版所によって、いつ出版された版をもとに編まれたのか気になるところであり、私などはまさに「闇雲」にこの問いに挑んでいる状況である。キリシタン版の出版認可の文言や奥付の記述などを便りに、いくつかの暫定的な版をテキスト校合し、やれサラマンカ版を使用した、いやベネチア版だ、などと推定していく。これはヨーロッパ近世文化史家P・パークらが論じる“文化翻訳Cultural translation”の足跡を実証的に辿るために、必須の作業でもある。

ところで、ヌエバ・エスパーニャの事例に関して、イエズス会総長メルクリアノは、宣教地での書籍不足の解消に最も有効な手立てとして、セビーリャの財務担当者(procurador)

に、必要な書籍のリストと相応の代金を送れば、アントワープから非常に簡便に供給されるだろう、と記している。当時、イエズス会の著作物を最もさかんに出版していたのはネーデルラントであり、殊にアントワープは1585年にスペイン軍に占領されて以来、スペイン語の出版物が多く出版され、スペインのブック・マーケットがインフラ未整備の時期、重要な役割を果たしている。

事実、イエズス会士ピエトロ・アラゴナ編によるキリシタン版『ナバーロの告解提要 *Compendium Manualis Navarri*』(1597)や、マヌエル・サ著『格言集 *Ahorismi cofessariorum*』(1603)の出版許可はアントワープで出ている。殊に前者に関しては、アントワープの有名なペトルス・ベレールスPetrus Bellerusの印刷所から1592年に出た版がキリシタン版の典拠である可能性を、最近発表させていただいた。ベレールスは書籍商としてスペインにも版図を伸ばし、フランクフルトの書籍市に定期的に赴いて、新大陸向けの書籍を集めていた人物である。またBellerusと取引があり、アントワープとセビーリャを結ぶ海路で活躍していた某書籍商についての研究もある。

キリシタン版の典拠となる書籍は、ヨーロッパでどのように集められたのか。ヨーロッパの単数ないし複数の都市から、書籍商のネットワークを通じて、リスボンなりセビーリャなりに集められたのか。これらに関する資料があれば、典拠探しの作業の大きなヒントになりえるのであるが。



『サントスの御作業』  
(Bibliothèque nationale de France)



## 研究事例——歴史的にメディアをとらえること

### 中世善通寺関係文書の伝来と現状について —本寺・末寺間での文書保管と移動のあり方—

守田 逸人

善通寺は、空海誕生地という由緒を持つ中世以来の讃岐国を代表する寺院である。善通寺に関わる中世以前の関係文書は、現在善通寺所蔵にかかる文書をはじめ、東寺文書、随心院文書として各所に所蔵され、300点弱ほど伝来している。とくに善通寺所蔵文書は讃岐地域を代表する中世史料群となっている。しかしながら、善通寺関係文書群のものに関する研究は皆無に等しい。

東寺は、平安期から鎌倉初期にかけて善通寺の本寺になっており、鎌倉前期以降は随心院が善通寺の本寺となってきた（随心院との本末関係については、現在は善通寺が本寺）。このことが、各所に関係文書が所在する要因となっている。報告では、おもに現在の善通寺所蔵文書（中世分）の伝来過程を明らかにするという立場から、上記各所に伝来した善通寺関係文書の具体的なあり方を検討することで、関係文書群の保管のあり方や文書の移動、書写作業などについて明らかにした。

各所に所蔵されている善通寺関係文書を確認すると、それぞれ大凡つぎのような特徴があることがわかる。まず、平安期～鎌倉初期にわたる東寺末寺期の文書は、ほぼ現在も東寺に伝来している。その後の鎌倉期以降の関係文書となると、善通寺所蔵文書には中世文書の正文類と、近世に作成された案文群が収められている。一方、随心院には書状類を基本とする正文の一部と、やはり近世の作成にかかる案文群が所蔵されている。善通寺所蔵にかかる文書群を具体的に検討すると、もともと中世段階で善通寺に発給され、そのまま善通寺に収められてきた文書が大部分を占めている。しかし一方では、明らかに中世の時点では本寺随心院に発給された文書がまとめられた卷子（綸旨・院宣、宣旨などの重書）などが存在する。

重書を集める卷子本がいつ善通寺に移管されたのか、その後の善通寺関係文書のあり方を検討していくと、本寺随心

院と末寺善通寺の本末関係と交流は近世以降も続いており、宝暦年間頃には焼失していた善通寺五重塔造営の機運の高まりとともに善通寺は関係文書の整理を行い、この段階で善通寺に所蔵した善通寺関係文書と、随心院に所蔵した善通寺関係文書を調査し、目録を作成していたことが判明する。そしてその目録によると、中世段階で随心院に充てて発給されたと考えられる重書類の卷子は、この段階で随心院の所蔵になっていたことが確認できる。なお、近世以降には、上記の文書目録の作成とともに、随心院・善通寺双方で中世文書の案文群を作成したり、所蔵文書の情報共有も行っていたことが確認できる。案文群は、時期によって軽重はあるが、確認出来る範囲では、寛文・延宝・享保・天保期と断続的に作成している。

さて、もともと随心院に所蔵されていた重書類が、いつ善通寺の所蔵に変わったのか、その時期を特定することは難しい。しかしその後、幕末以降には、随心院に所蔵されてきた上記重書類とは別の中世文書正文のまとまりが、善通寺に移動したことが確認できる。また、東京大学史料編纂所所蔵影写本や、善通寺所蔵の近代文書などと照らし合わせると、それらの重書類の移動時期はさらに下った時期になるかもしれない。

報告では、以上のような善通寺関係文書の伝来に関する基礎的な検討を行った。文書群の伝来を解明することは、アーカイブという論点のみならず、文書群の信頼性にも関わる重大な論点である。また、中世文書群は、所蔵者が自らの由緒を跡づける重要なものとなった故、こうした検討は善通寺がどのように自らの歴史と向き合ってきたのかという論点とも密接に関わってくる。報告では基礎的な作業に終始したが、今後は文書の移動のあり方や案文群が書写された具体的な背景など、各段階の中世文書をめぐる動きについて、詳細な検討が必要となる。（2021年9月25日に実施した日本中世寺社班研究会における報告より）



善通寺文書



